

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第327集

梁 場 遺 跡

(群馬県太田市高林南町)

一級河川石田川広域基幹河川改修事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

2003

群 馬 県 土 木 部
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第327集

YANA BA SITE
梁 場 遺 跡

(群馬県太田市高林南町)

一級河川石田川広域基幹河川改修事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

2003

群 馬 県 土 木 部
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



利根川刀水橋からの遺跡遠景（中央白い建物の左2.5cm 右は金山丘陵 南東から）



爪形文土器（縄文時代草創期）

序

利根川の支流である石田川は、群馬県地域の古墳時代前期の土器である石田川式土器の名で、良く知られた川です。大間々扇状地の伏流水が各地で湧き出る新田郡新田町の豊富な水を集めて流れ、太田市南端で利根川に合流しています。

豊かな水量は時として水害の原因ともなり、そのためこの石田川の河川改修事業が行われることになりました。当事業団では平成6年の新田町上江田西田遺跡の調査を皮切りに、この石田川河川改修に伴う発掘調査を続けて参りました。ここに報告する梁場遺跡は、利根川との合流点に近い最も下流の遺跡にあたります。

この遺跡の周辺は戦前から数多くの古墳の密集する地域として知られ、今日でも墳丘に雑木林が生い茂った古墳が少なからず残っています。幅広い利根川の緩やかな流れと共に、工業都市太田にあって、美しい景観がなお人々の心をなごませる土地とも言えます。

今回の調査では、狭い範囲ながら濃密な古代の集落の一部が検出されました。近くにある寺院跡や条里制地割りとの関係も含めて、古代史の一端が明らかになることが期待されます。また県内でも珍しい縄文時代草創期の爪形文土器も出土し、大変貴重な発見となりました。

なお、本事業と対をなす石田川河川改修聖川工区の石田川遺跡については、すでに同遺跡調査会より報告書が刊行されていますが、当事業団の調査報告書と併せて利用されれば、石田川流域一帯の歴史解明に大きく資することになるかと考えます。

最後になりますが、群馬県土木部・群馬県教育委員会文化課・太田市教育委員会そして地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行まで終始ご協力を賜りましたことに、心から感謝の意を表します。また調査と整理にあたった各担当者・作業員そして整理嘱託員・補助員の労をねぎらい、序といたします。

平成15年11月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小野 宇三郎

例 言

1. 本書は、平成13年度に一級河川石田川広域基幹河川改修事業(中小)に伴い発掘調査し、平成15年度に一級河川石田川広域基幹河川改修事業に伴う整理委託契約に基づき実施した「梁場遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。なお、本遺跡から北300mに位置する高林梁場遺跡は、太田市教育委員会が平成6年に調査し、「市内遺跡X(高林梁場遺跡)」として報告されている。本遺跡と高林梁場遺跡は同じ遺跡であるが、群馬県教育委員会が付した「梁場遺跡」を統一名称として使用する。

2. 本書に所収の遺跡名と発掘調査地の所在地番は、以下の通りである。

遺跡名 梁場(やなば)遺跡

所在地 群馬県太田市高林南町193-1、193-2番地

3. 発掘調査及び整理事業は、群馬県教育委員会が調整し、群馬県土木部と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が委託契約を締結し実施した。

4. 調査履行期間 平成13年9月10日～平成13年12月28日

5. 調査組織

本部

理事長 小野宇三郎 常務理事(総務担当)吉田 豊 常務理事(事業担当)赤山容造

東毛事務所

所 長 水田 稔 調査研究部長 津金沢吉茂 調査研究第1課長 佐藤明人

調査担当 坂井 隆、西原和久

発掘作業員

井野米子、古川 薫、古川加代子、藤田美恵子、武藤里美、蓼沼幸子、飯村さわ子、新井進一

長谷川秀子、並木道夫、山口信行、高木徳雄、小林 栄、井上 明、門脇弘泰、斎藤 正、新井秀雄

6. 整理履行期間 平成15年9月1日～平成15年11月30日

7. 整理組織

事務担当

理事長 小野宇三郎 常務理事 住谷永市 事業局長 神保侑史

管理部長 萩原利通 調査研究部長 右島和夫 総務課長 植原恒夫

資料整理課長 相京建史 調査研究係長 國定 均 総務課係長 高橋房雄、竹内 宏

総務課主幹 須田朋子、吉田有光 総務課主任 阿久澤玄洋 総務課主事 田中賢一

整理担当 今井和久 整理囑託員 新井悦子

整理補助員 土田三代子、田中富子、光安文子、吉澤照恵、渡辺八千代

8. 本書作成担当

編 集 今井和久

遺物観察 縄文土器 関根慎二、その他の遺物は今井和久

縄文土器の分類は石坂茂氏、弥生土器観察は大木紳一郎氏のご教示を頂いた。


執筆分担 1序章 坂井 隆、2検出結果 今井和久、3まとめ 坂井 隆・今井和久

遺構写真撮影 坂井 隆、西原和久 遺物写真撮影 佐藤元彦

機械実測 富沢スミ江、伊東博子、岸 弘子、廣津真希子

9. 本遺跡の記録図・記録写真・出土遺物は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が管理し、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。
10. 発掘調査及び本書作成にあたり、下記の関係機関・関係諸氏にご助言・ご指導・ご協力を得た。記して感謝の意を表したい。(敬称略)
群馬県土木部、太田市教育委員会、群馬県教育委員会文化課、地元関係者各位

凡 例

1. 挿図縮尺は図版に記載した。概要は以下の通りである。
遺構 全体図1/200、竪穴住居1/60、竈1/30、埋甕1/20、土坑・ピット1/40
遺物 土器1/3
2. 遺構図の方位は座標北である。座標系は、国土座標第IX系(旧測地系)である。
3. 遺構図版中にある+印とそれに記される3桁2種の数値は、国家座標のX・Y値を表す。ただし、5桁数値のうち前2桁のX値27、Y値41は省略してある。方眼杭は南東杭を基準にし、遺構のかかった面積の多い方のグリッド杭で位置を示した。
4. 遺構断面実測図及び等高線に記した数値はL= mで表示し、標高値を示す。
5. 遺構面積は、デジタルプランメーターによる3回の計測の平均値である。
6. 住居の方位は、竈の付設された住居では、竈を持つ壁(竈を持つと推定された壁)に直交する線を主軸線とした。土坑・ピット・埋甕は、長軸方向を主軸線とした。
7. 本書で使用したスクリーンパターンは、下記の通りである。
遺構 焼土分布 地山(断面) 遺物 黒色処理 石は点描で表現

8. 遺物番号は、遺構ごとに登録した。遺物番号は、本文、挿図、観察表、写真図版と同一である。
9. 土器の実測図は原則として四分画法をとった。残存量が1/2以下の遺物は180°展開して図上復元した。回転実測の場合は口縁線を切断し表現した。へら削りの方向は→で示す。
10. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、新版標準土色帖(1987年)によった。

目次

口絵

序

例言

凡例

目次(挿図目次・表目次)

1 序章

1-1 発掘調査に至る経過	1
1-2 周辺の環境と遺跡	2
1-2-1 地理的環境	2
1-2-2 歴史的環境	2
1-3 調査経過と方法	4
1-3-1 調査経過	4
1-3-2 調査方法	4

2 検出結果

2-1 遺構・遺物の概要	6
2-2 縄文	8
2-3 古代	8
2-4 近世	16
2-5 時期不明	16
2-6 遺構外出土遺物	17

3 まとめ

3-1 太田市南部の条里地割りと高林古墳群について(坂井 隆)	20
3-1-1 条里と東矢島廃寺	20
3-1-2 古墳時代の遺物と八瀬川	22
3-2 県内の草創期爪形文土器出土遺跡について(今井和久)	24

写真図版(遺構、遺物)

報告書抄録・奥付

挿 図 目 次

第1図	梁場遺跡位置図	1	第14図	11A・B号遺構	14
第2図	周辺遺跡図	3	第15図	9号遺構出土遺物	14
第3図	調査区図	5	第16図	4・9・17号遺構	15
第4図	梁場遺跡全体図	7	第17図	10・16号遺構、出土遺物	15
第5図	13号遺構、出土遺物	8	第18図	18・19・20号遺構	16
第6図	2号遺構	8	第19図	5号遺構	16
第7図	2号遺構出土遺物	9	第20図	14・15号遺構	16
第8図	3号遺構、出土遺物	10	第21図	遺構外出土遺物(縄文時代)	17
第9図	12号遺構、出土遺物	11	第22図	遺構外出土遺物(弥生時代)	18
第10図	1号遺構、出土遺物	12	第23図	遺構外出土遺物(古墳時代)	19
第11図	6号遺構、出土遺物	13	第24図	遺構外出土遺物(平安時代)	19
第12図	7号遺構	13	第25図	太田南部の条里地割りと高林古墳群	21
第13図	8号遺構	14	第26図	爪形文土器出土遺跡位置図	24

表 目 次

第1表	13号遺構(埋甕)遺物観察表	8	第8表	16号遺構(ピット)遺物観察表	15
第2表	2号遺構(住居)遺物観察表	9	第9表	遺構外遺物観察表(縄文時代)	17
第3表	3号遺構(住居)遺物観察表	10	第10表	遺構外遺物観察表(弥生時代)	18
第4表	12号遺構(住居)遺物観察表	11	第11表	遺構外遺物観察表(古墳時代)	19
第5表	1号遺構(土坑)遺物観察表	12	第12表	遺構外遺物観察表(平安時代)	19
第6表	6号遺構(土坑)遺物観察表	13	第13表	県内の草創期爪形文土器出土遺跡	24
第7表	9号遺構(ピット)遺物観察表	15			

写 真 図 版 目 次

口絵	利根川刀水橋からの遺跡遠景(南東から)	12号遺構遺物出土状況(東から)	
	爪形文土器(縄文時代草創期)	12号遺構掘り方(西から)	
PL1	調査区全景(北から)	1号遺構遺物出土状況(東から)	
	遺跡遠景(南東から)	1号遺構全景(南から)	
	遺跡遠景(北東から)	6号遺構遺物出土状況(南から)	
	石田川(西から)	7号遺構セクション(西から)	
	利根川(東から)	PL4	8号遺構全景(南から)
PL2	13号遺構セクション(西から)		11号遺構セクション(南から)
	13号遺構全景(西から)		4・9・17号遺構全景(北から)
	2号遺構遺物出土状況(西から)		9号遺構遺物出土状況(南から)
	2号遺構遺物出土状況(東から)		17号遺構遺物出土状況(南から)
	2号遺構使用面(東から)		10・16号遺構全景(南東から)
	2号遺構掘り方(北から)		18号遺構全景(北から)
	3号遺構遺物出土状況(西から)		低地(黒色土)遺物出土状況(北から)
	3号遺構使用面(東から)	PL5	1～16号遺構出土遺物
PL3	3号遺構貯蔵穴遺物出土状況(南から)	PL6	遺構外(縄文、弥生、古墳、平安)出土遺物
	3号遺構貯蔵穴全景(南から)		

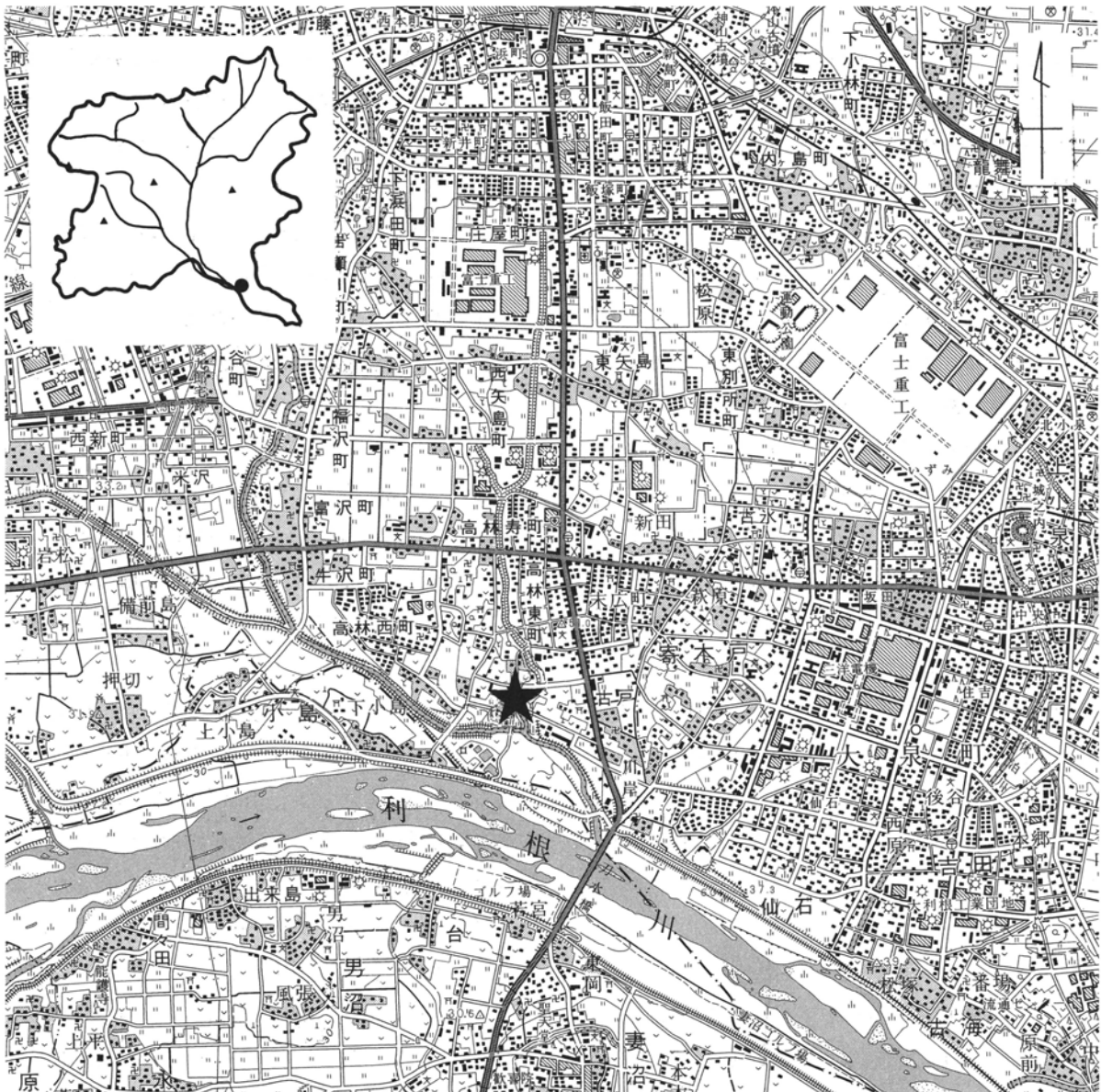
第1章 序章

1-1 発掘調査に至る経過

利根川支流の石田川は、新田郡新田町から尾島町を経て太田市南西部を流れる小河川である。近年、太田市西部では大規模な工業団地が造成され、また宅地開発も活発に行われているため、集中豪雨が續くとこれらの開発地に集積した雨水が石田川に集中し、下流で洪水被害にみまわれる被害が相次いだ。そのため流域全体での河川改修事業が群馬県土木部で計画され、平成5年度から県教育委員会により事

業地での試掘調査が各事業年度ごとに実施された。確認された遺跡については、翌6年新田町の上江田西田遺跡の第一次調査に始まる発掘調査を、断続的に平成13年度まで継続することになった。

最終調査年度の同年度には、本遺跡と共に上江田西田遺跡の第二次調査を当事業団が実施した。本遺跡と異なって源流に近い同遺跡の調査は、渇水期の冬季に行った。



第1図 梁場遺跡位置図(国土地理院地形図1:50,000「深谷」使用)

1-2 周辺の環境と遺跡

1-2-1 地理的環境

石田川は、大間々扇状地の末端である新田町大根の矢太神沼を源流とし、尾島町世良田まで約5km南流した後、東に流れを変えて太田市南端の古戸で利根川左岸に合流している。全長15kmほどの小河川だが、狭いところでは幅2、3mに過ぎない南流部分に比べ、扇状地末端の多くの湧水を集める東流部分は急激に川幅を広め10m前後に達する。

石田川に合流するそのような支流の最大のものが、利根川合流点から3kmの位置にある蛇川である。扇状地東側の八王子丘陵からの水を集める蛇川に対し、金山丘陵から流れる水は八瀬川となって利根川合流点から1kmの本遺跡地で石田川に合流している。なお蛇川合流点以東は、明治初年には石田川ではなく蛇川と呼ばれていた。現況の石田川はそのような流れだが、利根川合流部から2kmほどについては、南の利根川とに挟まれた小島地区が埼玉県大里郡妻沼町に所属するように、少なくとも近世では利根川本流の流路であったと考えられる。

蛇川以西の地域は豊富な湧水からの水が、木崎台地など点在する低く狭い沖積微高地をめぐっているのに対し、蛇川以東は邑楽台地に続く比高5mほどの高林台地が左岸に展開している。

本遺跡地は、洪積世に形成された高林台地南端を旧利根川が削ったところで、そこに八瀬川が北から合流した地点にあたる。八瀬川は、金山丘陵西側を巡った後に太田市街地に入り、そこからほぼ直線的に南下し高林台地を貫通して流れている。明らかに人為的な流路であるが、本遺跡地周辺の1キロほどは蛇行が見えるため、本来、旧利根川に合流する小さな沢であった可能性が考えられる。

1-2-2 歴史的環境

まず旧石器時代の遺跡である東別所遺跡(45)では、最終末期の槍先形尖頭器が出土している。

縄文時代の遺跡では、早期の撚糸文土器が古戸遺跡(36)や小谷場遺跡(34)で発見されている。古戸遺

跡には中期後半の遺物も見える。後期の遺跡としては、寄木戸遺跡(37)が知られている。また上記矢太神沼は、後期の集落遺跡でもある。晩期では寄木戸遺跡で注口土器が出土している。

石田川の名を高めた最大のものは、上野地域の古墳時代前期を代表する土器である石田川式土器の標識遺跡である石田川遺跡である。1952(昭和27)年の石田川河川改修工事に伴う土取り工事によって発見された石田川遺跡(2)は、本遺跡(1A)から3km上流の米沢川との合流点に位置する。群馬大学の尾崎喜左雄・松島榮治等によって発掘調査が実施され、東海系の特徴を示す出土土器が石田川式土器と命名された。古墳時代前期の極めて重要な遺跡として位置づけられている。

古墳時代のものとしては、本遺跡の北西側に展開する高林古墳群(25)が大きな意味を持っている。現存する墳丘だけでも14基を数えるこの古墳群は、かつては80基以上で形成されていた5世紀から6世紀を中心とする大群集墳である。一方、その東には6世紀代の東矢島古墳群(24)が展開している。また高林古墳群の北西に隣接する朝子塚古墳(16)は、墳丘長124mを測る東日本最古級の4世紀の前方後円墳と考えられている。また石田川遺跡の北西にあった米沢二ツ山古墳(39)は5世紀代の前方後円墳で、墳丘長は74mを測る。

古代になると、東矢島遺跡(30)では瓦の出土が知られている。また後述のように東西に走る現在の国道354号線の北側では太田南部条里地割りが比較的最近まで残っていた。さらにこの地域には東山道武蔵路が通っていたとの推定もあるが、現在まだ不明確である。なお国道407号線の旧道は上記条里と一致しており、近世には古戸太田道として残っていた。

中世の代表的遺跡である仙石城跡(51)は、利根川左岸に接する丘陵に作られたもので、本遺跡からは1.5mほどの距離に位置する。

1 序章

1A梁場遺跡、1B高林梁場遺跡、2石田川遺跡、3高林西原古墳群、4細谷清川遺跡、5細谷東遺跡、6細谷中遺跡、7米沢中遺跡、8細谷八幡古墳群、9細谷古墳群、10富沢古墳群、11富沢館遺跡、12頼母子古墳、13牛沢城趾、14沢野村27号古墳、15鐘馗塚古墳、16朝子塚古墳、17高林遺跡、18沢野村102号古墳、19小谷場古墳群、20牛沢遺跡、21高林西原公園古墳、22沢野村96号古墳、23西矢島古墳群、24東矢島古墳群、25高林古墳群、26岩松金剛寺西遺跡、27岩瀬川古墳群、28新ヶ谷戸遺跡、29道知塚遺跡、30東矢島遺跡、31高林向野遺跡、32三入北遺跡、33細谷南遺跡、34小谷場遺跡、35仙石丘山遺跡、36古戸遺跡、37寄木戸遺跡、38米沢ニッ山遺跡、39米沢ニッ山古墳、40岩松遺跡、41下田島遺跡、42専光寺付近遺跡、43道祖遺跡、44川入遺跡、45東別所遺跡、46飯塚遺跡、47諏訪山遺跡、48常木遺跡、49岩松本郷遺跡、50堀口館遺跡、51仙石城跡、52細谷南遺跡、53福沢新田遺跡

参考文献：群馬県教育委員会『群馬県の中世城郭跡』1988、群理文『年報20・21』2001・2002、石田川遺跡調査会『石田川遺跡』2001、太田市教育委員会『太田市内遺跡II』1985、『太田市内遺跡XIV』2000、大泉町教育委員会『古海原前古墳群』1986、『専光寺付近遺跡』1988、『古海松塚古墳』2002、尾島町教育委員会『岩松金剛寺西遺跡』2000

1-3 調査経過と方法

1-3-1 調査経過

高林梁場遺跡(1B)は、1994(平成6)年1・2月に太田市教育委員会によって発掘調査が行われた。八瀬川右岸の高林四区梁場公民館の東に当たる地域で、公園建設などを理由として1,040㎡の発掘調査がなされた。その結果、古墳時代後期の竪穴住居群14軒、9世紀代を中心とする古代の竪穴住居群26軒が発見された。この時の調査では、南北100m強の範囲に設定された幅2m弱の試掘坑全体で竪穴住居群が発見されており、周辺の広い範囲での濃密な分布が十分に想定されるものであった。

その後、同調査地点の南150mの位置にあたる八

瀬川右岸の石田川との合流地点において、ここで報告する当事業団による本遺跡(1A)の調査を実施した。この調査は、2001(平成13)年10月より12月までを調査期間としたが、主要な調査は10月末までには終了した。

調査地は両川の合流点であり、調査事務所も改修工事事業地内に設置せざるをえなかったため、他の調査では味わえない困難な状況に直面した。特に雨季であったため、当初、設定されていた事務所設置場所は施工前に完全に水没してしまったり、調査中にはちょっとした降雨でも川が増水して調査地への冠水がしばしば起きることがあった。また調査地への進入路もすぐに悪路になってしまったり、逆に水道を設置して飲料水や雑用水の確保することができないために、調査の実施そのものも簡単なことではなかった。

参考文献：太田市教育委員会『市内遺跡X』1994

1-3-2 調査方法

県教委の試掘成果をもとに遺構の存在が想定される範囲の表土を重機で掘削した。しかし掘削範囲約450㎡の中で八瀬川に接する北東側約50㎡は、川に向かって大きく攪乱を受けていた。また南東側及び南側についても、その攪乱が延長していることが明らかになったため、表土掘削は行わなかった。これらの攪乱からはビニールゴミが多く出ており、今回の改修事業以前になされた何らかの改修工事に伴うものと考えられた。その結果、調査範囲になったのが第4図に示した範囲で、北側半分強の高林台地の延長が水の影響を受けた黄色シルト質の台地であるのに対し、南側半分は次第にレベルが下がって、黒色粘質土の沖積低地となっていた。

調査にあたっては、国土座標に基づいて5mごとのグリッド(第4図参照)を設定した。また水準基準は、利根川水系に設定された河川水準系をもとに、一般の陸地水準系に置き換えたものである。

台地部については、攪乱部分で遺構確認面より約1m下位で旧石器試掘を行ったが、人工的な遺物は確認できなかった。



第3図 調査区図

第2章 検出結果

2-1 遺構・遺物の概要

調査により、下記の計20の遺構が検出された。

縄文 ……埋甕1基

古代 ……竪穴住居3軒、土坑5基
ピット8基

近世 ……土坑1基

時期不明 ……土坑2基

埋甕(13号遺構)は大半が削平されており、わずかに土器の胴部が残存しているだけであった。

2軒の竪穴住居(2・3号遺構)は、いずれも東側に竈を持つ方形のもので、北東隅では貯蔵穴状の掘り込みが検出された。しかし、柱穴はあまり明瞭ではなく、掘り方の存在もそれほど顕著ではなかった。2軒は少し形状が異なることと最も近い部分では掘り込みの距離は30cm程度しか離れてなかったため、同時存在したとは考えられない。一般的な土師器の坏・甕等の日常具が出土したが、縄文土器片などの遺物も混在していた。さらに、3号遺構の一部を壊

した状態で、別の竪穴住居(12号遺構)の竈を検出した。焼施設であり土師器甕片も出土し、南西側では壁状部分も見られたが、大部分は調査区域外になるため全容は明らかにできなかった。

土坑では、10世紀代の土師器・須恵器碗類数個体が集中して出土した土坑(1号遺構)を南東隅で検出した。一部攪乱を受けているが、袋状の形状をなしていた。

ピット群は、掘立柱建物の可能性も考えられたが、確証は得られなかった。4・9・17号遺構は直線的に並ぶため、柵列と想定される。他は単独の遺構として報告したい。

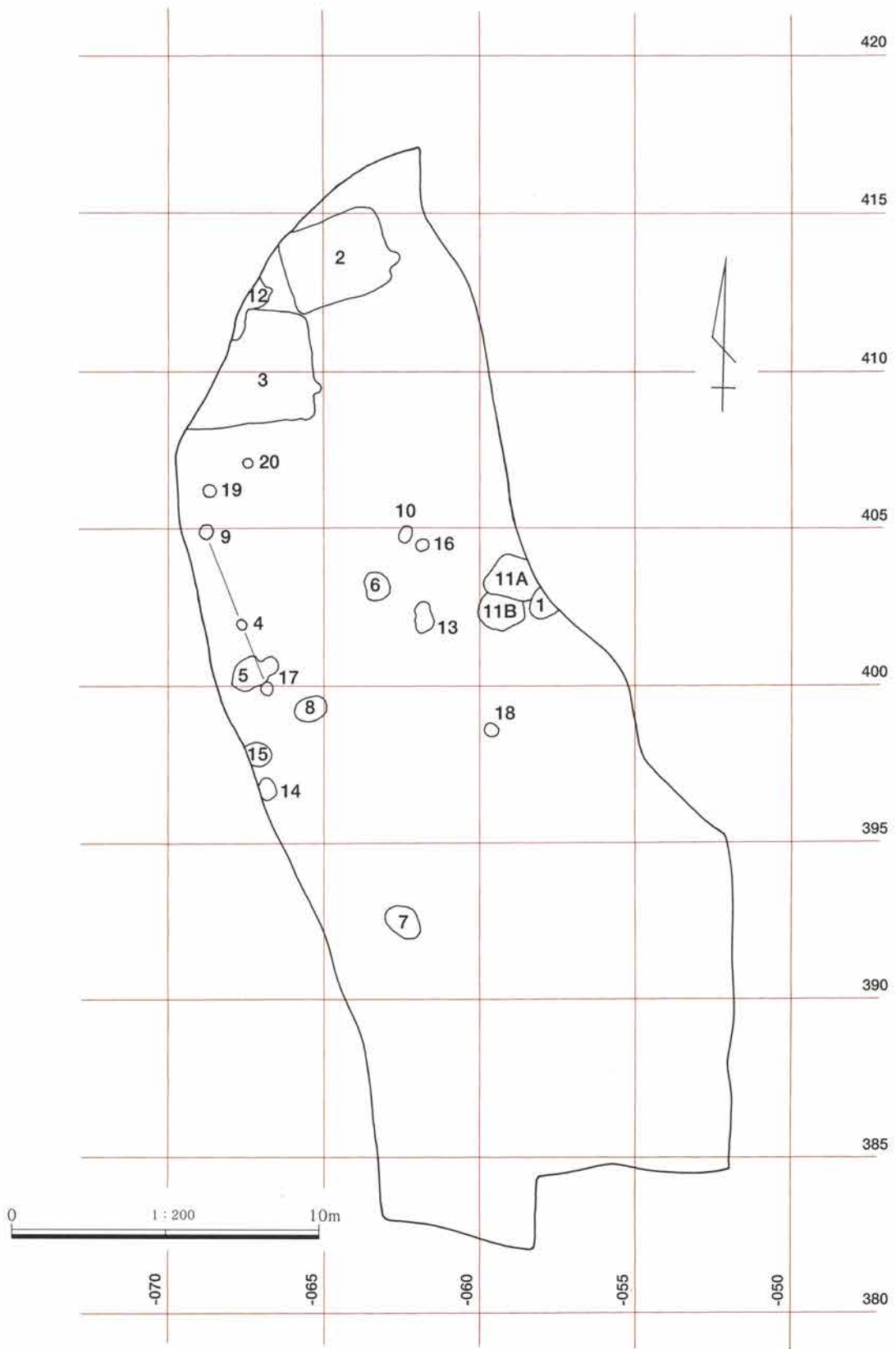
遺物は竪穴住居以外は全体的に少なく、遺構外遺物もあまり多くない。縄文時代草創期・早期～後期、弥生時代中期、古墳時代前期、平安時代の土器などが出土した。



調査区全景(南から)



調査風景(南東から)



(座標数値は旧国土座標)

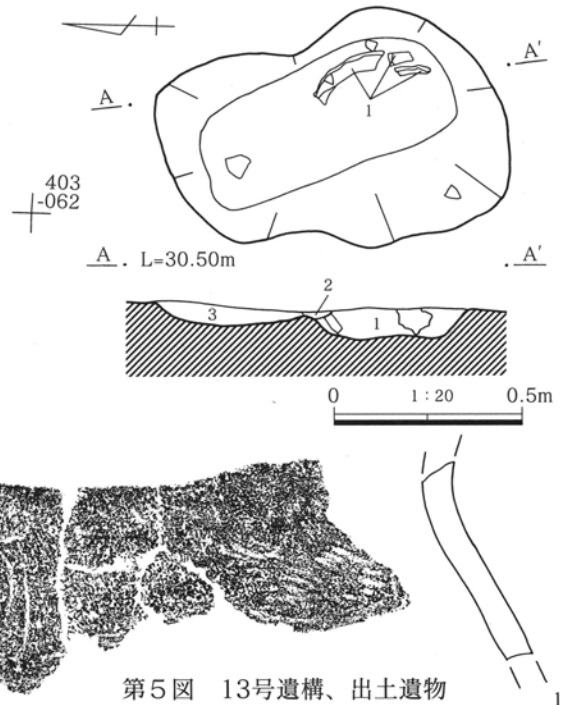
第4図 梁場遺跡全体図

2 検出結果

2-2 縄文

13号遺構(埋甕)(第5図、PL2・5)

位置 400-060G 重複 なし 形状 8の字形
 規模 長軸0.7m×短軸0.3m×深さ0.1m 方位
 N-23°-W 埋土 1 褐色粘質土(7.5YR4/3)粒
 子細、しまり良、粘性強く固い。微少の白色粒、焼
 土・炭化粒(径1~2mm)含む。2 褐色粘質土
 (7.5YR4/3)1層とほぼ同質だが、焼土の含有なし。
 3 暗褐色粘質土(10YR3/4)粒子細、しまり弱、含有
 物なし。遺物 深鉢1点が出土し
 ている。他に縄文土器片2点出土。
 所見 中期後半(加曾利E3式期)
 の所産。



第5図 13号遺構、出土遺物

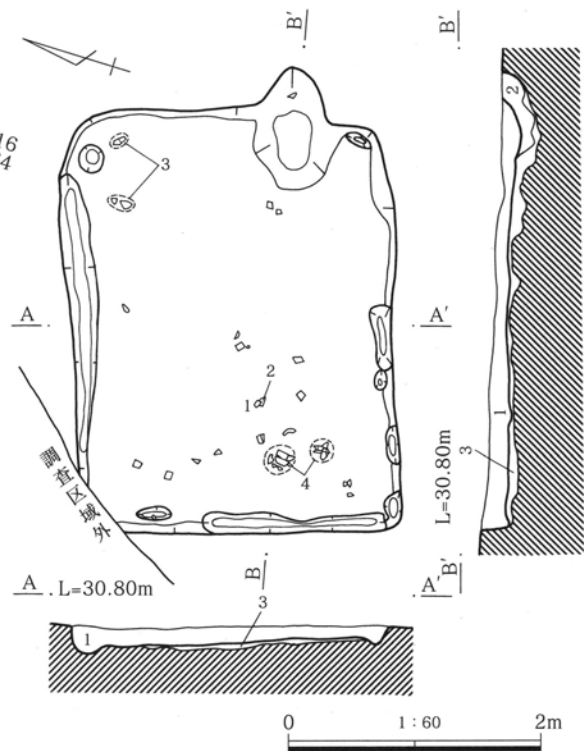
第1表 13号遺構(埋甕)遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
1-1 PL5	縄文土器 深鉢	頭部1/3	口- 底- 高-	①粗砂 石英 ②良好 ③にぶい赤褐5YR5/4	外面に単節RL縄文を施す。平行させた沈線により垂下する 曲線を描く。頭部で屈曲する。中期後半。 (加曾利E3式期)

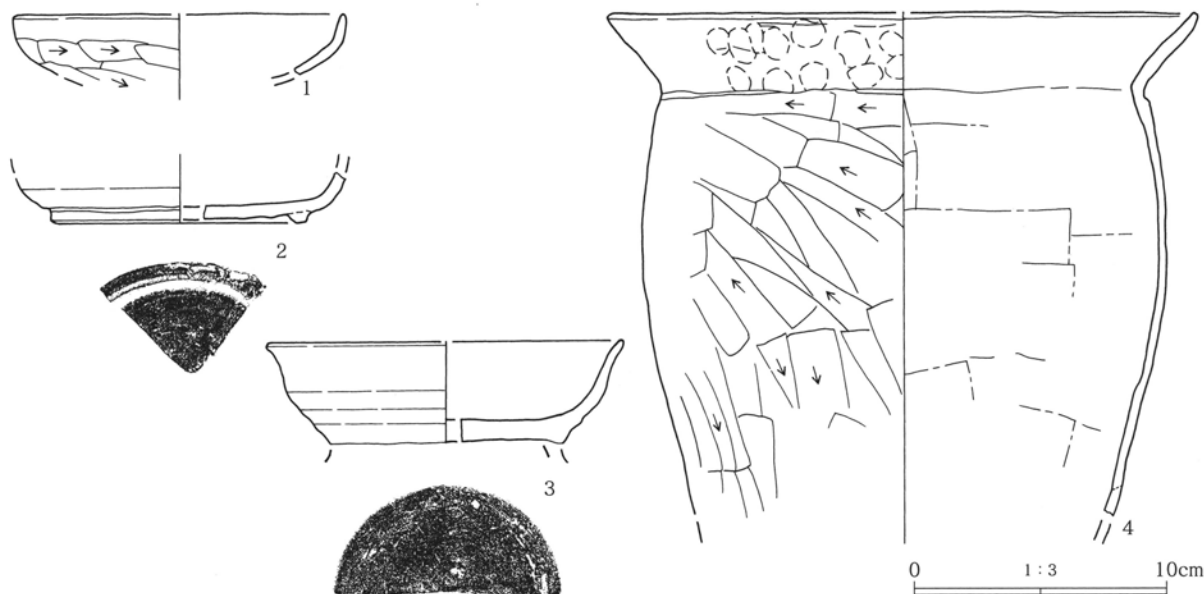
2-3 古代

2号遺構(竪穴住居)(第6図、PL2・5)

位置 410-060G 重複 なし 形状 隅丸長方
 形 規模 長軸3.2m×短軸2.4m×深さ0.1m 面
 積 7.6㎡ 方位 N-82°-E 埋土 1 暗褐色
 粘質土(10YR3/3)粒子細、しまり良、粘性やや強、
 全体にローム質塊(径1~5cm)含む。2 暗褐色粘質
 土(10YR3/3)1層と同質だが、僅かに暗色でローム
 質塊の含有が少ない。3 黒褐色粘質土(10YR2/3)粒
 子細、かなり固く締まっている。壁溝 幅約8cm、
 深さ約4cmの壁溝が南側(0.5m)・西側(1.4m)
 ・北側(1.9m)で検出された。貯蔵穴・柱穴 検
 出されなかった。竈 東壁面の南寄り掘り込んで
 造られている。焼土・灰などの痕跡あまりなく残
 存が悪い。両袖方向30cm、煙道方向45cmを測る。
 遺物 土師器坏・甕、須恵器有台坏・碗が出土して
 いる。他に、土師器片86点、須恵器片2点が出土。
 所見 出土遺物から8世紀前半の所産。



第6図 2号遺構



第7図 2号遺構出土遺物

第2表 2号遺構(住居)遺物観察表

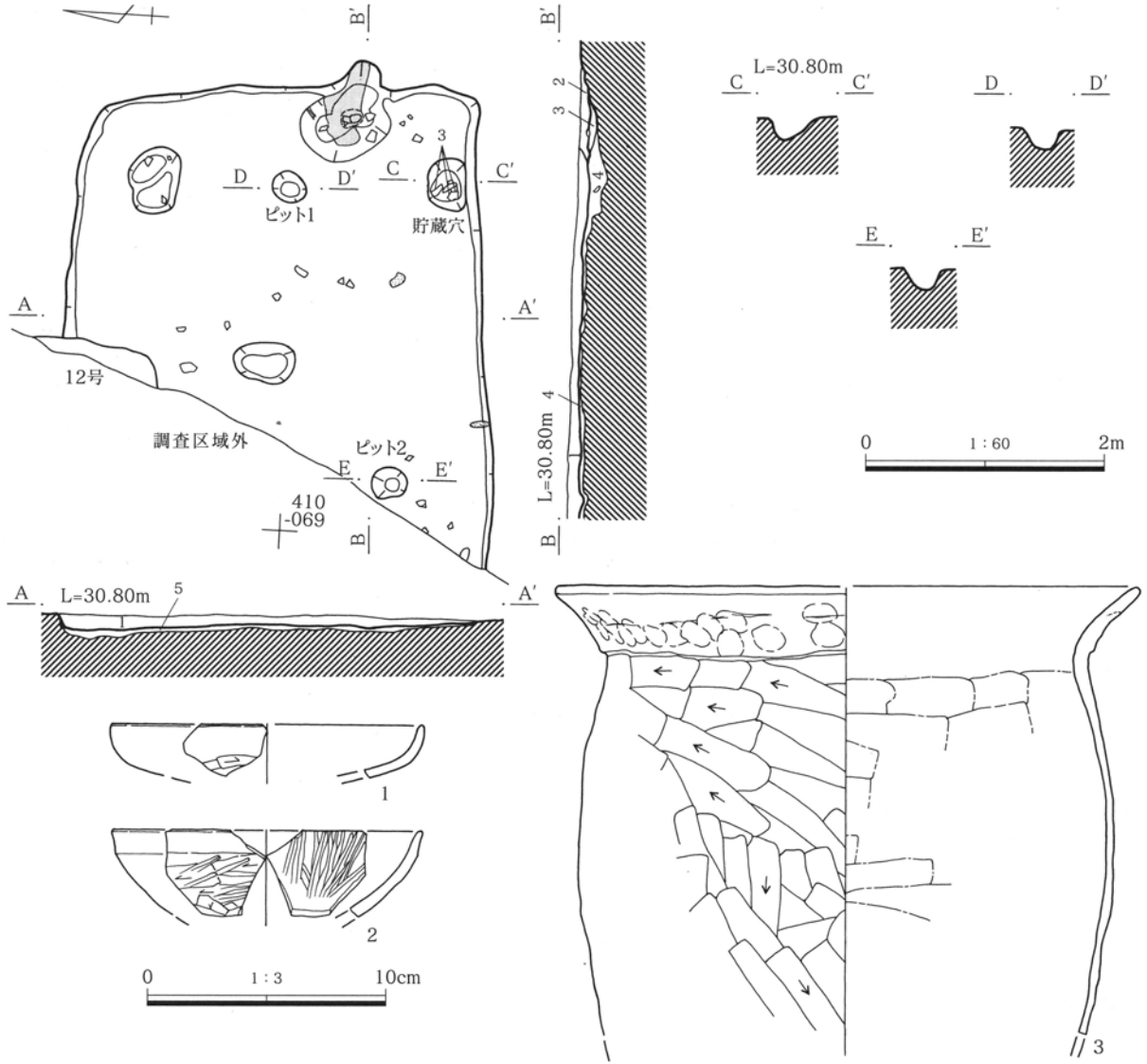
挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
7-1 PL5	土師器 坏	+13 口~体部1/3	口-(13.0) 底- 高-(2.4)	①細砂 輝石 ②酸化焰 ③にぶい赤褐5YR5/4	体部は丸みを帯び、口縁部は内湾する。 外面 口縁部横ナデ、体部は横方向のへら削り。 内面 口縁部横ナデ。
7-2 PL5	須恵器 有台坏	+13 体下半~底部 1/4	口- 底-(10.0) 高-(2.0)	①緻密 黒色鉱物 ②還元焰 ③灰5Y6/1	付高台。高台は短い。底部は右回転へら削り。
7-3 PL5	須恵器 碗	床直 高台部欠1/3	口- 14.0 底- 高-(3.8)	①粗砂 褐色粒 ②酸化焰 硬質 ③灰黄褐10YR6/2	体部は丸みを帯び、口縁部は外反する。 付高台剥離。底部は右回転へら削り。
7-4 PL5	土師器 甕	床直~+7 口~胴部上半 1/6	口-(23.4) 底- 高-(19.7)	①細砂 輝石 ②酸化焰 ③赤褐5YR4/4	口縁部は外反し、頸部は「く」の字状を呈す。 外面 口縁部横ナデ、胴部はへら削り。 内面 口縁部横ナデ、胴部はへらナデ。

3号遺構(竪穴住居)(第8図、PL2・3・5)

位置 405-065G 重複 12号遺構と重複している。本遺構が古い。形状 隅丸長方形 規模 長軸(3.9)m×短軸3.3m×深さ0.1m 面積 (9.5) m² 方位 N-88° -E 埋土 1にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)粒子細、しまりやや弱、少しシルト質でボソボソした感じ。ローム質粒(径2~5mm)少し混じる。2暗褐色粘質土(10YR3/4)1層に焼土粒・炭化粒(径3~8mm)混在。3にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)粒子細、しまり弱、灰が混じり、焼土粒(径1cm)も含む。4黒褐色粘質土(7.5YR3/1)粒子細、しまり良、焼土粒・炭が混じる。5灰黄褐色土(10YR4/2)粒子細、しまり良、焼土粒ごく少量含む。壁溝 検出されなかった。貯蔵穴 住居の南東に

設置。土師器甕が出土。長軸40cm・短軸30cm・深さ20cmの楕円形を呈する。柱穴 柱穴と思われるピットは2基検出された。ピット1は、径15cm・深さ20cm。ピット2は、径12cm・深さ17cmを測る。竈 東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。両袖方向45cm、煙道方向35cmを測る。遺物 土師器坏・甕が出土している。他に、土師器片186点、須恵器片2点が出土。所見 出土遺物から8世紀前半の所産。

2 検出結果



第8図 3号遺構、出土遺物

第3表 3号遺構(住居)遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
8-1 PL5	土師器 坏	覆土 破片	口-(13.0) 底- 高-(2.1)	①細砂 輝石 ②酸化焰 ③にぶい橙5YR6/4	体部は丸みを帯び、口縁部は内湾する。 外面 口縁部横ナデ、体部は横方向のへら削り。 内面 口縁部横ナデ。
8-2 PL5	土師器 坏	覆土 破片	口-(12.8) 底- 高-(3.5)	①細砂 ②酸化焰 ③明赤褐5YR5/6	体部は丸みを帯び、口縁部に緩い稜を持つ。 外面 口縁部横ナデ、体部はへら削り後へら磨き。 内面 丁寧なへら磨き。
8-3 PL5	土師器 甕	貯蔵穴 口~胴部上半 2/3	口-(24.4) 底- 高-(18.5)	①細砂 輝石 ②酸化焰 ③褐7.5YR4/4	口縁部は大きく外反し、頸部には指頭圧痕残る。 外面 口縁部横ナデ、胴部はへら削り。 内面 口縁部横ナデ、胴部はへらナデ。

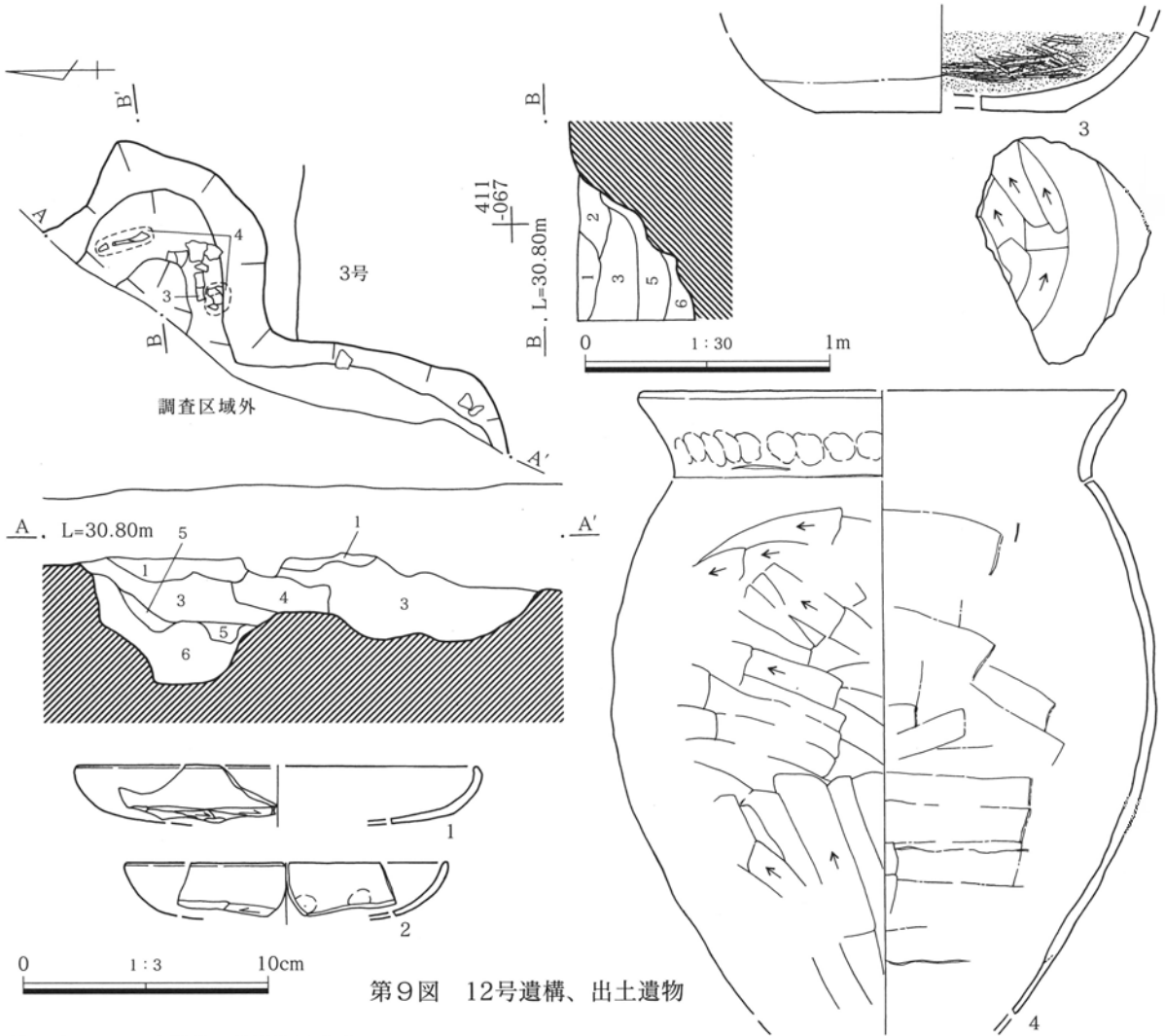
12号遺構(竪穴住居)(第9図、PL3・5)

位置 410-065G 重複 3号遺構と重複している。本遺構が新しい。形状 不明 規模・面積 測定不可能 方位 N-77° -W 埋土 1 暗褐色粘質土(10YR3/3)粒子細、しまり良、にぶい黄褐

色シルト塊(径5cm)含む。2 褐色粘質土(7.5YR4/6)粒子細、しまりやや弱、全体に焼土粒含む。3 暗褐色粘質土(10YR3/3)粒子細、しまりやや弱、焼土粒(径3~10mm)混じる。4 灰黄褐色土(10YR4/2)粒子

細、しまり良、焼土粒を少量含む。5 黒褐色粘質土 (10YR2/2) 粒子細、しまりやや弱、全体に灰を含む。6 暗褐色粘質土 (10YR3/3) 粒子細、しまり良、全体に焼土粒を含む。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面を掘り込んで造られている

と想定される。燃烧部からは土師器甕が出土し、焼土・灰が検出された。両袖方向(70)cm、煙道方向90cmを測る。遺物 土師器坏・鉢・甕が出土している。他に、土師器片42点が出土。所見出土遺物から8世紀後半の所産。



第9図 12号遺構、出土遺物

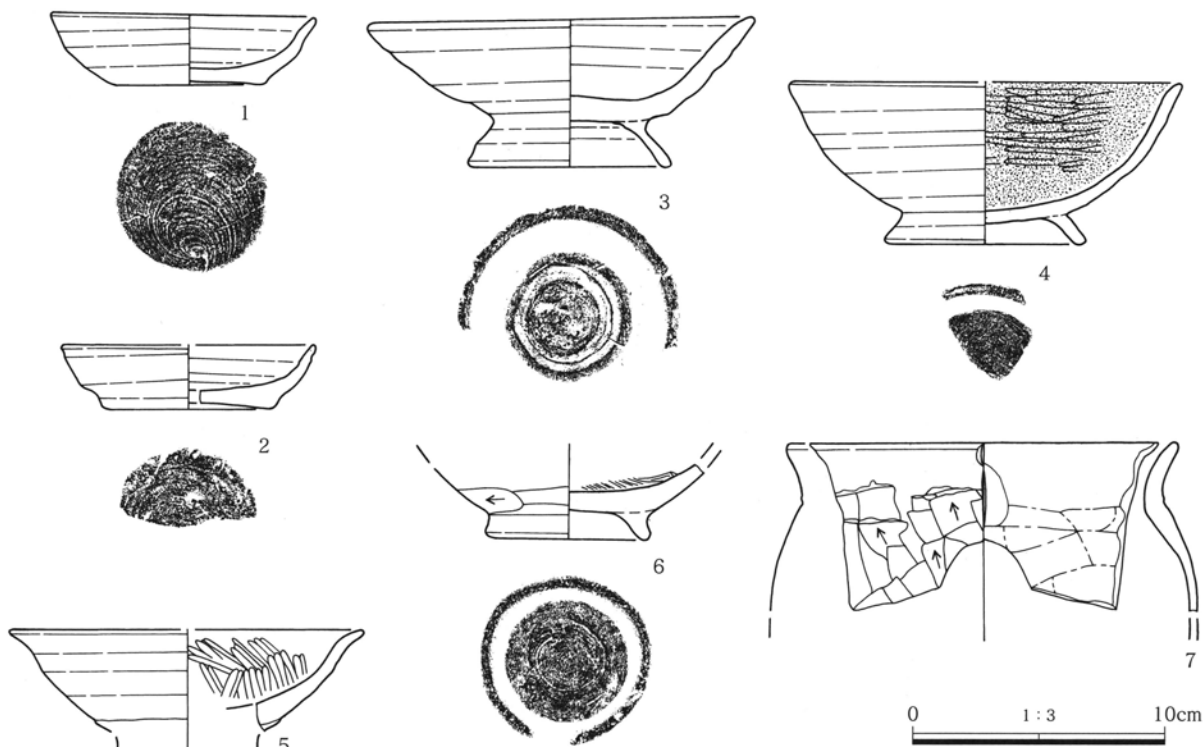
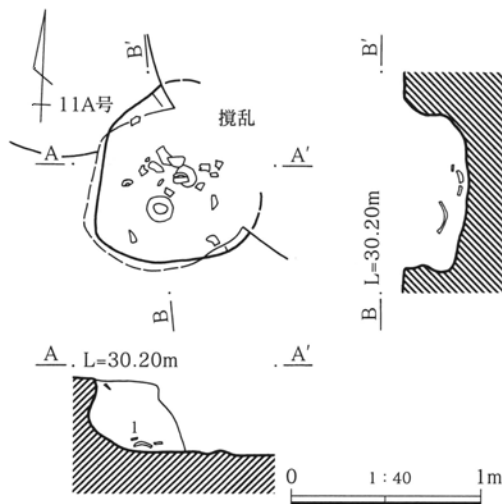
第4表 12号遺構(住居)遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
9-1 PL5	土師器 坏	覆土 口~体部1/5	口-(16.0) 底- 高-(2.3)	①細砂 輝石 ②酸化焰 ③橙5YR6/6	体部は丸みを帯び、口縁部は内湾する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ。
9-2 PL5	土師器 坏	覆土 口~体部1/6	口-(13.0) 底- 高-(2.1)	①細砂 輝石 ②酸化焰 ③明赤褐5YR5/6	体部は丸みを帯び、口縁部は内湾する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ、体部に指頭圧痕あり。
9-3 PL5	土師器 坏	覆土 体~底部1/4	口- 底-(10.0) 高-(3.2)	①細砂 輝石 ②酸化焰 ③明褐7.5YR5/6	体部は丸みを帯び、底部は平底を呈する。 外面 体部下半は横ナデ、底部はへら削り。 内面 丁寧なへら磨き。黒色処理。
9-4 PL5	土師器 甕	竈 口縁部1/5と 胴部片	口-(19.4) 底- 高-(25.2)	①細砂 輝石 ②酸化焰 ③明赤褐5YR5/6	口縁部は外反し、頸部には指頭圧痕残る。 外面 口縁部横ナデ、胴部はへら削り。 内面 口縁部横ナデ、胴部はへらナデ。

2 検出結果

1号遺構(土坑)(第10図、PL3・5)

位置 400-055G 重複 11A号遺構と重複。本遺構が新しい。形状 平面は楕円形で、掘り方は袋状を呈する。規模 長軸(0.9)m×短軸(0.8)m×深さ0.3m 方位 測定不可能 埋土 1暗褐色粘質土(10YR3/3)粒子細、しまり良、焼土(径3~5mm)・炭化粒(径5~8mm)が全体に混じる。遺物 土師器小型甕、須恵器坏・碗(内黒土器1点)が出土している。他に、土師器片136点、須恵器片1点が出土。所見 出土遺物から10世紀の所産。北東側は攪乱によって壊されていた。



第10図 1号遺構、出土遺物

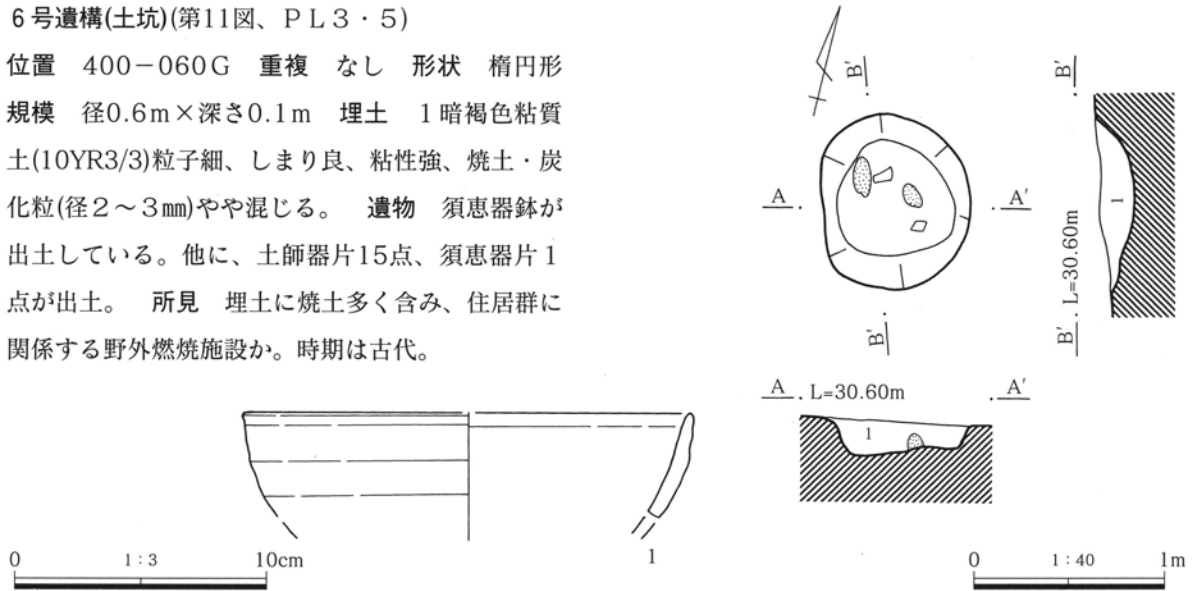
第5表 1号遺構(土坑)遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
10-1 PL5	須恵器 坏	覆土 2/3	口- 10.4 底- 6.0 高- 2.9	①細砂 褐色粒 ②酸化焰 硬質 ③にぶい橙7.5YR7/4	体部は丸みを帯び、口縁部はやや外反する。右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
10-2 PL5	須恵器 坏	覆土 1/3	口- (9.8) 底- (6.6) 高- 2.5	①細砂 褐色粒 ②酸化焰 硬質 ③浅黄橙7.5YR8/4	体部は丸みを帯び立ち上がる。右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
10-3 PL5	須恵器 碗	覆土 完形	口- 15.0 底- 7.8 高- 5.9	①細砂 褐色粒 ②酸化焰 硬質 ③橙7.5YR7/6	器壁厚く、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外形する。付高台。高台は長く「ハ」の字状に開く。右回転轆轤成形。
10-4 PL5	須恵器 碗	覆土 1/4	口-(15.4) 底- (7.6) 高- 6.3	①細砂 輝石 ②酸化焰 硬質 ③にぶい橙7.5YR5/4	体部は丸みを帯び立ち上がる。付高台。高台は「ハ」の字状に開く。内面は黒色処理、へら磨き。

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
10-5 PL5	須恵器 碗	覆土 口～体部1/5	口-(13.8) 底- 高-(4.0)	①細砂 褐色粒 ②酸化焰 硬質 ③にぶい橙7.5YR7/4	体部は丸みを帯び、口縁部は外反する。 内面は轆轤整形後、へら磨き。
10-6 PL5	須恵器 碗	覆土 体下半～高台 部	口- 底- 6.2 高- (3.0)	①細砂 褐色粒 ②酸化焰 硬質 ③にぶい橙10YR5/4	器壁厚い。付高台。外面体部は手持ちへら削り。 内面は轆轤整形後、へら磨き。
10-7 PL5	土師器 小型甕	覆土 口～胴上位片	口-(15.2) 底- 高- (6.6)	①細砂 輝石 ②酸化焰 ③にぶい橙5YR6/3	口縁部は外反し、胴部はふくらむ。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ、以下へらナデ。

6号遺構(土坑)(第11図、PL3・5)

位置 400-060G 重複 なし 形状 楕円形
規模 径0.6m×深さ0.1m 埋土 1暗褐色粘質
土(10YR3/3)粒子細、しまり良、粘性強、焼土・炭
化粒(径2～3mm)やや混じる。遺物 須恵器鉢が
出土している。他に、土師器片15点、須恵器片1
点が出土。所見 埋土に焼土多く含み、住居群に
関係する野外燃焼施設か。時期は古代。



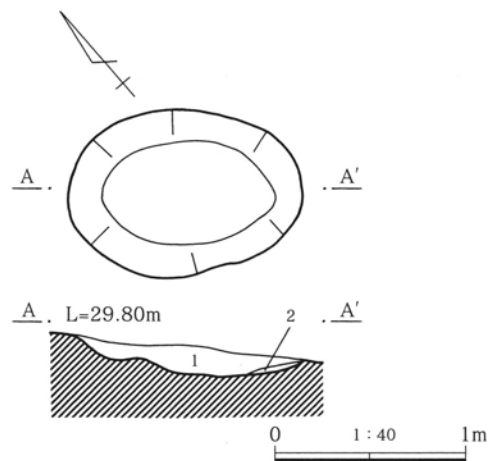
第11図 6号遺構、出土遺物

第6表 6号遺構(土坑)遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
11-1 PL5	須恵器 鉢	口縁部1/6	口-(17.8) 底- 高-(4.0)	①細砂 小礫 ②酸化焰 硬質 ③褐7.5YR4/3	体部は丸みを帯び、口縁部は短く外反する。 内外面とも口縁部横ナデ。轆轤成形(回転方向不明)。

7号遺構(土坑)(第12図、PL3)

位置 390-060G 重複 なし 形状 楕円形
規模 長軸0.9m×短軸0.5m×深さ0.1m 方位
N-49°-W 埋土 1黒褐色粘質土(10YR7/1)
粒子細、しまり良、やや粘性強い、微小の白色粒
(As-Cか)混じる。2暗褐色粘質土(7.5YR3/3)粒子
細、しまり良、粘性強、微砂粒が少し混じる。遺
物 なし 所見 性格不明、時期は古代。

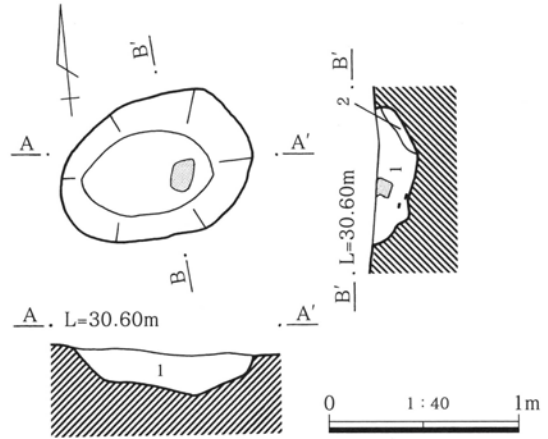


第12図 7号遺構

2 検出結果

8号遺構(土坑)(第13図、PL4)

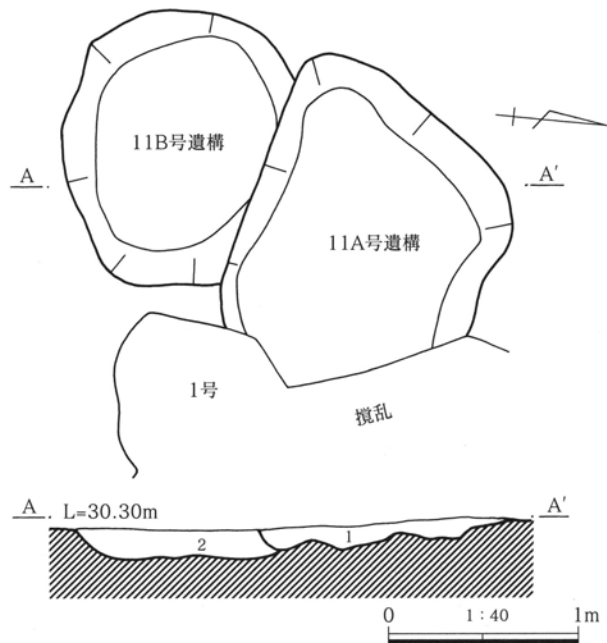
位置 395-065G 重複 なし 形状 楕円形
 規模 長軸0.7m×短軸0.4m×深さ0.2m 方位
 N-87°-W 埋土 1暗褐色粘質土(10YR3/3)
 粒子細、しまり良、粘性強、焼土・炭化粒(径5~
 8mm)やや多い。遺物 土師器片6点、須恵器片
 1点が出土。所見 埋土に焼土多く含み、住居群
 に関する野外燃焼施設か。時期は古代。



第13図 8号遺構

11号遺構(土坑)(第14図、PL4)

位置 400-055G 重複 1号遺構と重複。本遺
 構が古い。形状 不整形 規模 長軸2.6m×短
 軸2.0m×深さ0.2m 埋土 1暗褐色粘質土
 (10YR3/4)粒子細、しまりやや弱、焼土粒(径2~
 3mm)をかなり多く含む(11A号遺構)。2黒褐色粘質
 土(10YR2/3)粒子細、しまり良、粘性強、含有物な
 し(11B号遺構)。遺物 土師器片3点が出土。
 所見 性格は不明だが、土層断面から二つの土坑
 (11A号遺構が新しい)の重複が看取できた。時期は
 古代。



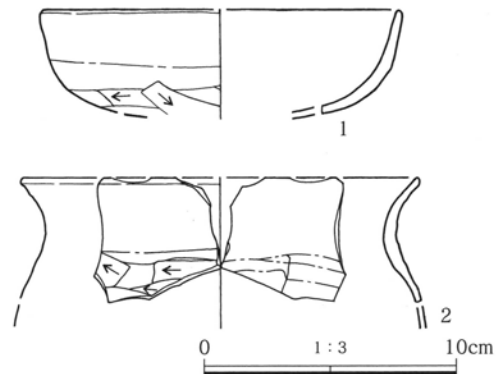
第14図 11A・B号遺構

4号遺構(ピット)(第16図、PL4)

位置 400-065G 重複 なし 形状 円形
 規模 径0.1m×深さ0.2m 埋土 不明 遺物
 土師器片4点が出土。所見 9号・17号遺構と
 並ぶ柵列か。時期は古代。

9号遺構(ピット)(第15・16図、PL4・5)

位置 400-065G 重複 なし 形状 円形
 規模 径0.1m×深さ0.5m 埋土 不明 遺物
 土師器坏・甕が出土している。他に、土師器片3点
 が出土。所見 4号・17号遺構と並ぶ柵列か。
 時期は古代。



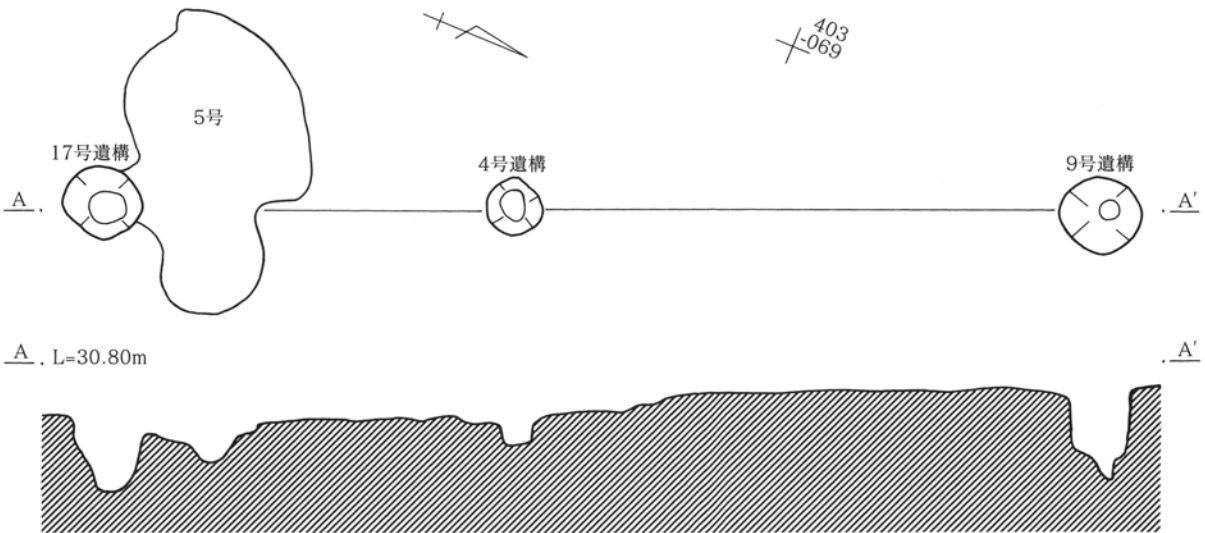
第15図 9号遺構出土遺物

17号遺構(ピット)(第16図、PL4)

位置 395-065G 重複 5号遺構と重複。本遺
 構が古い。形状 円形 規模 径0.1m×深さ
 0.4m 埋土 不明 遺物 なし 所見 4号・9
 号遺構と並ぶ柵列か。時期は古代。

第7表 9号遺構(ピット)遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
15-1 PL5	土師器 坏	覆土 口~体部1/3	口-(14.2) 底- 高-(4.0)	①細砂 輝石 ②酸化焰 ③明褐7.5YR5/6	体部は丸みを帯び、口縁部は直立する。 外面 口縁部横ナデ、体下半から底部はへら削り。 内面 口縁部横ナデ。
15-2 PL5	土師器 甕	覆土 口~胴部片	口-(15.6) 底- 高-(4.9)	①細砂 輝石 ②酸化焰 ③明赤褐5YR5/6	口縁部は外反し、胴部は丸くふくらむ。 外面 口縁部横ナデ、胴部はへら削り。 内面 口縁部横ナデ、胴部はへらナデ。

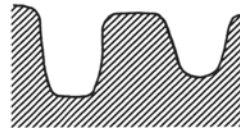
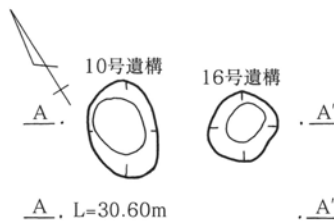


第16図 4・9・17号遺構

0 1:40 1m

10号遺構(ピット)(第17図、PL4)

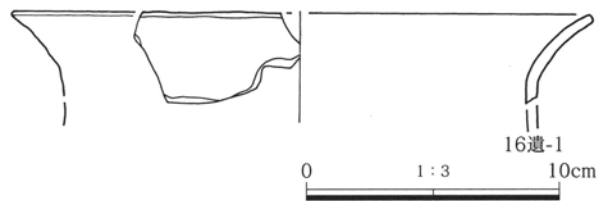
位置 400-060G 重複 なし 形状 楕円形
規模 長軸0.3m×短軸0.2m×深さ0.4m 方位
N-2°-E 埋土 不明 遺物 なし 所見
性格不明、時期は古代。



0 1:40 1m

16号遺構(ピット)(第17図、PL4・5)

位置 400-060G 重複 なし 形状 円形
規模 径0.2m×深さ0.3m 埋土 不明 遺物
土師器甕が出土している。他に、土師器片20点が
出土。 所見 性格不明、時期は古代。



第17図 10・16号遺構、出土遺物

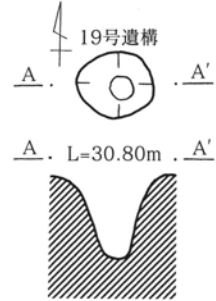
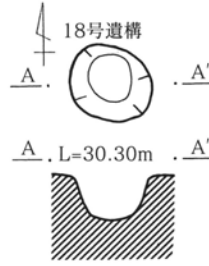
第8表 16号遺構(ピット)遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
17-1 PL5	土師器 甕	覆土 口縁部片	口-(22.9) 底- 高-(3.6)	①細砂 輝石 ②酸化焰 ③にぶい褐7.5YR5/4	口縁部は大きく外反する。 内外面とも口縁部は横ナデ。

2 検出結果

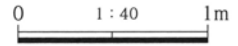
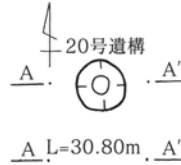
18号遺構(ピット)(第18図、PL4)

位置 395-055G 重複 なし 形状 円形
 規模 径0.2m×深さ0.3m 埋土 不明 遺物
 土師器片6点が出土。 所見 性格不明、時期は古代。



19号遺構(ピット)(第18図、PL4)

位置 405-065G 重複 なし 形状 円形
 規模 径0.2m×深さ0.5m 埋土 不明 遺物
 なし 所見 性格不明、時期は古代。



第18図 18・19・20号遺構

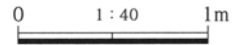
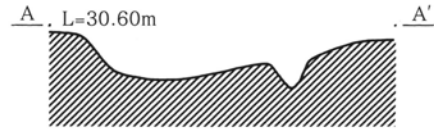
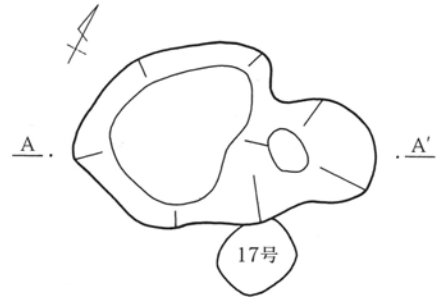
20号遺構(ピット)(第18図、PL4)

位置 405-065G 重複 なし 形状 円形
 規模 径0.1m×深さ0.3m 埋土 不明 遺物
 なし 所見 性格不明、時期は古代。

2-4 近世

5号遺構(土坑)(第19図)

位置 400-065G 重複 17号遺構と重複。本遺構が新しい。形状 不整形 規模 長軸1.4m×短軸0.7m×深さ0.2m 方位 N-66°-E 埋土 不明 遺物 なし 所見 性格不明、時期は近世。

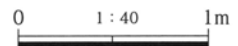
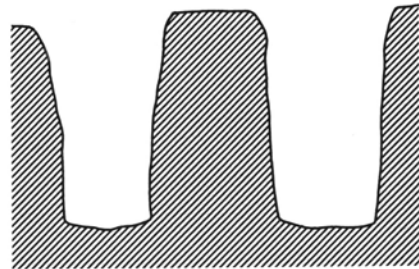
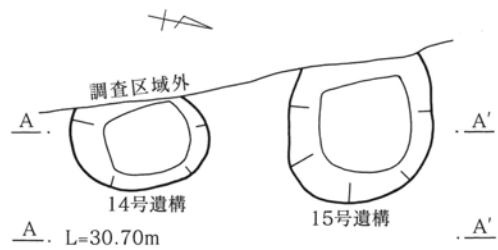


第19図 5号遺構

2-5 時期不明

14号遺構(土坑)(第20図)

位置 395-065G 重複 なし 形状 長楕円形
 規模 長軸0.5m×短軸0.3m×深さ1.1m 方位 N-16°-W 埋土 不明 遺物 土師器片9点が出土。 所見 性格・時期不明。



第20図 14・15号遺構

15号遺構(土坑)(第20図)

位置 395-065G 重複 なし。形状 隅丸方形
 規模 長軸0.5m×短軸0.5m×深さ1.1m 方位 測定不可能 埋土 不明 遺物 土師器片13点、縄文土器片1点が出土。 所見 性格・時期不明。

2-6 遺構外出土遺物

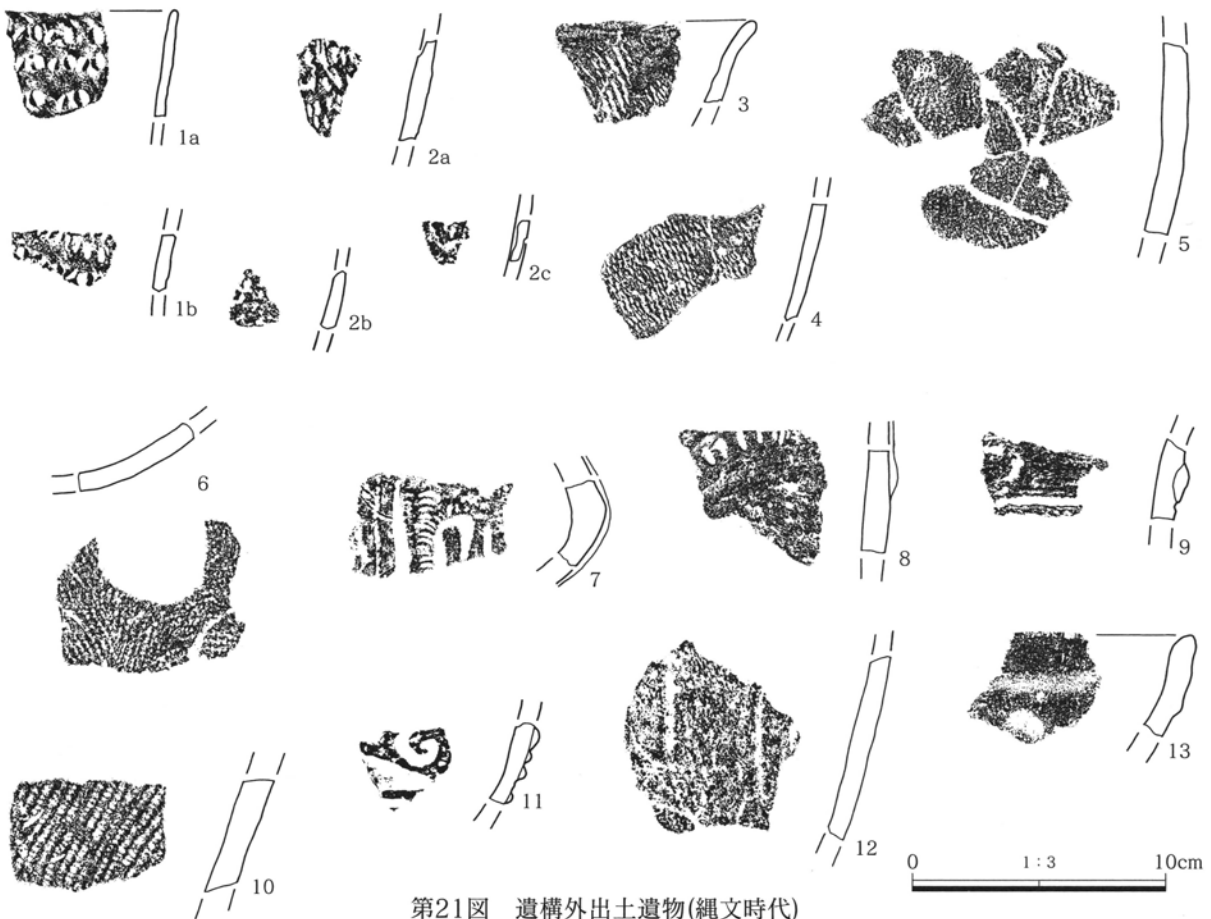
本節では、住居・土坑・ピット等の遺構出土以外の遺物を扱う。遺跡南側の低地部分の調査で、黒色

土中から出土した遺物(主に縄文土器)や遺構出土ながら帰属の不詳なものを取り上げた。

1 縄文時代(第21図、PL6)

縄文時代では、中期の土器を中心に、草創期の爪形文土器、早期前半の撚糸文土器(夏島式期)、早期後半の条痕文系土器などが出土している。破片数は、草創期爪形文土器5点(2個体か)、早期前半撚糸文土器50点、早期後半条痕文系土器2点、前期(諸磯

式期か)1点、中期中葉阿玉台式期5点、勝坂式期1点、中期後葉加曾利E1式期3点、加曾利E2式期6点、加曾利E3式期8点、加曾利E2~E3式期32点、不明2点である。



第21図 遺構外出土遺物(縄文時代)

第9表 遺構外遺物観察表(縄文時代)

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考 (時期)
1 a・b PL6	縄文土器 深鉢	口~胴部 片	口- 底- 高-	①細砂 輝石 ②やや軟質 ③灰褐7.5YR4/3	器壁薄い。1 aと1 bは、同一個体。「ハ」の字状の爪形文が施文されている。1 aの口唇部には棒状工具による刻目が施されている。	爪形文土器 草創期
2 a~c PL6	縄文土器 深鉢	胴部片	口- 底- 高-	①細砂 白色軽石 ②やや軟質 ③赤褐2.5YR4/6	器壁薄い。2 a、2 b、2 cは同一個体か。爪形文が施文されている。2 bと2 cは摩滅が激しい。	爪形文土器 草創期

2 検出結果

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考 (時期)
3 P L 6	縄文土器 深鉢	口縁部片	口— 底— 高—	①細砂 白色軽石 ②良好 ③褐7.5YR4/3	口縁部はやや外反する。無節のRIを軸に右巻きした撚糸をやや斜め方向に縦位に施文する。	撚糸文土器 早期前半
4 P L 6	縄文土器 深鉢	胴部片	口— 底— 高—	①細砂 白色軽石 ②良好 ③明赤褐5YR5/6	無節のRIを軸に右巻きした撚糸を器面に縦位に施文する。	撚糸文土器 早期前半
5 P L 6	縄文土器 深鉢	胴部片	口— 底— 高—	①細砂 白色軽石 ②良好 ③明赤褐5YR5/6	全体に摩滅が多く、施文原体がはっきりしない。無節のRIを軸に右巻きした撚糸と思われる。施文方向は、一定しない。	撚糸文土器 早期前半
6 P L 6	縄文土器 深鉢	底部片	口— 底— 高—	①細砂 白色軽石 ②良好 ③橙5YR6/6	無節のRIを軸に右巻きした撚糸文。底部破片のため原体の施文方向が周囲から行われ一定しない。	撚糸文土器 早期前半
7 P L 6	縄文土器 深鉢	口縁部片	口— 底— 高—	①細砂 小礫 ②良好 ③にぶい赤褐5YR4/4	太めの隆帯を貼付し、半截竹管で連続する爪形文を施文する。隆帯間は、太めの沈線が施文される。	勝坂3 中期中葉
8 P L 6	縄文土器 深鉢	胴部片	口— 底— 高—	①細砂 雲母 小礫 ②良好 ③橙7.5YR6/6	器面に篋状工具による爪形文が施文される。指頭による凹凸が器面に見られる。	阿玉台 中期中葉
9 P L 6	縄文土器 深鉢	口縁部片	口— 底— 高—	①細砂 雲母 小礫 ②良好 ③褐7.5YR4/4	口縁部文様帯の下部分である。隆帯と沈線が施文されている。	阿玉台 中期中葉
10 P L 6	縄文土器 深鉢	胴部片	口— 底— 高—	①細砂 小礫 ②良好 ③にぶい赤褐5YR4/4	単節LRの縄文原体が横位に施文される。	加曾利E 1 中期後葉
11 P L 6	縄文土器 深鉢	口縁部片	口— 底— 高—	①細砂 褐色粒 ②良好 ③灰褐7.5YR4/2	口縁部文様帯の下部部分、隆帯による渦巻き文が見られる。	加曾利E 2 中期後葉
12 P L 6	縄文土器 深鉢	胴部片	口— 底— 高—	①細砂 小礫 ②良好 ③明赤褐5YR5/8	器面全体に摩滅が多く文様は、はっきりしないが沈線による垂線が施文される。	加曾利E 2 中期後葉
13 P L 6	縄文土器 深鉢	口縁部片	口— 底— 高—	①細砂 小礫 ②良好 ③7.5YR明褐5/6	口縁部下に横位の沈線で文様帯を区画し、その下を渦巻き文様が施文されている。	加曾利E 3 中期後葉

2 弥生時代(第22図、P L 6)

掲載した土器は3点とも、弥生時代中期の土器であ

本遺跡では、弥生時代の遺構は検出されなかった。

る。



第22図 遺構外出土遺物(弥生時代)

第10表 遺構外遺物観察表(弥生時代)

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考 (時期)
22-1 P L 6	土師器 壺	頸部片	口— 底— 高—	①細砂 白色軽石 ②良好 ③にぶい赤褐5YR4/4	地文にLR縄文を施し、横位の沈線文2条を巡らす。	中期後半
22-2 P L 6	土師器 壺	肩部片	口— 底— 高—	①細砂 白色軽石 ②良好 ③赤褐5YR4/6	複数沈線による連弧文と思われる文様を施す。	中期後半
22-3 P L 6	土師器 壺	肩部片	口— 底— 高—	①細砂 輝石 ②良好 ③黒褐5YR3/1	横位の沈線文を施す。	中期後半

3 古墳時代(第23図、PL6)

掲載した土器は、4点とも古墳時代前期の土器である。



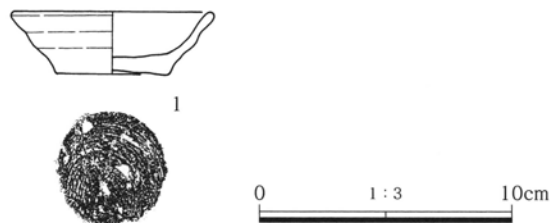
第23図 遺構外出土遺物(古墳時代)

第11表 遺構外遺物観察表(古墳時代)

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
23-1 PL6	土師器 台付甕	口縁部片	口- (18.0) 底- 高- (3.2)	①細砂 輝石 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐2.5YR5/6	外反するS字状の口縁部。 外面 口縁部横ナデ、以下縦方向の刷毛目。 内面 口縁部横ナデ。
23-2 PL6	土師器 台付甕	胴~台部片	口- 底- 高- (3.9)	①粗砂 輝石 ②酸化焰 ③にぶい褐7.5YR5/4	外面 へら削り。 内面 へらナデ。
23-3 PL6	土師器 甕	口縁部片	口- 底- 高-	①細砂 ②酸化焰 ③にぶい黄橙10YR7/4	口縁部は大きく外反し、面取り調整を施す。 外面 斜め方法の刷毛目後、横ナデ。 内面 横ナデ。(千種甕)
23-4 PL6	土師器 甕	口縁部片	口- 底- 高-	①細砂 ②酸化焰 ③にぶい黄橙10YR7/4	口縁部は大きく外反し、口唇部は受け口状を呈す。 内外面 横ナデ、面取り調整。(千種甕)

4 古代(平安時代)(第24図、PL6)

本遺跡で検出された遺構の時期は、ほとんどが古代であるが、遺構外出土遺物は少ない。



第24図 遺構外出土遺物(平安時代)

第12表 遺構外遺物観察表(平安時代)

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
24-1 PL6	須恵器 坏	400-060G 2/3	口- 7.8 底- 4.4 高- 2.5	①細砂 褐色粒 ②酸化焰 ③橙7.5YR6/6	体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。

第3章 まとめ

3-1 太田市南部条里地割り及び高林古墳群との関係について

坂井 隆

今回の調査では、8世紀から10世紀の遺構を検出すると共に、微少なながら古墳時代前期の遺物を発見した。八瀬川と石田川の合流点に位置する本調査地での発見は、古墳時代後期及び9世紀を中心とする竪穴住居群を検出した太田市教育委員会による高林梁場遺跡の調査成果を併せれば、興味深い事実が考えられる。すなわち、北方に広がる太田南部条里地割り・北西側に展開する高林古墳群との関係であり、さらにそれらと深い関わりのある八瀬川の存在である。

3-1-1 条里と東矢島廃寺

本調査で確認した竪穴住居は8世紀代の僅か3軒であり、他には10世紀の土坑と時期不明のピット群である。単純な数量としては、決して多いとは言えない。しかし狭小な調査面積、そして安定した台地部がさらにその半分程度でしかないことを見るなら、数量以上の意味があることに気付く。まして3軒の竪穴住居は重複か近接しており、同時存在がありえないことを考えれば、相当な遺構集中であると理解できる。

本遺跡全体での古代集落の範囲は、高林梁場遺跡の調査で検出された濃密な竪穴住居の重複状況を含めて検討すると、少なくとも高林梁場遺跡調査地区北側の八瀬川屈曲部分から本調査地までの南北約400mの広がりがあると考えられる。東西の幅は、東が八瀬川を限界とする可能性があり、西側は希薄になる傾向がある。そのため、高林梁場遺跡での検出範囲である約100m程度と考えられるので、3～4万㎡程度の広がりが見込める。その中でも地域的な濃密はあるだろうが、8世紀から10世紀の間での極めて大規模な集落遺跡である可能性が高い。

この時代の周辺の遺跡では、まず八瀬川の対岸北北東方向には緑釉陶器が出土した高林向野遺跡があ

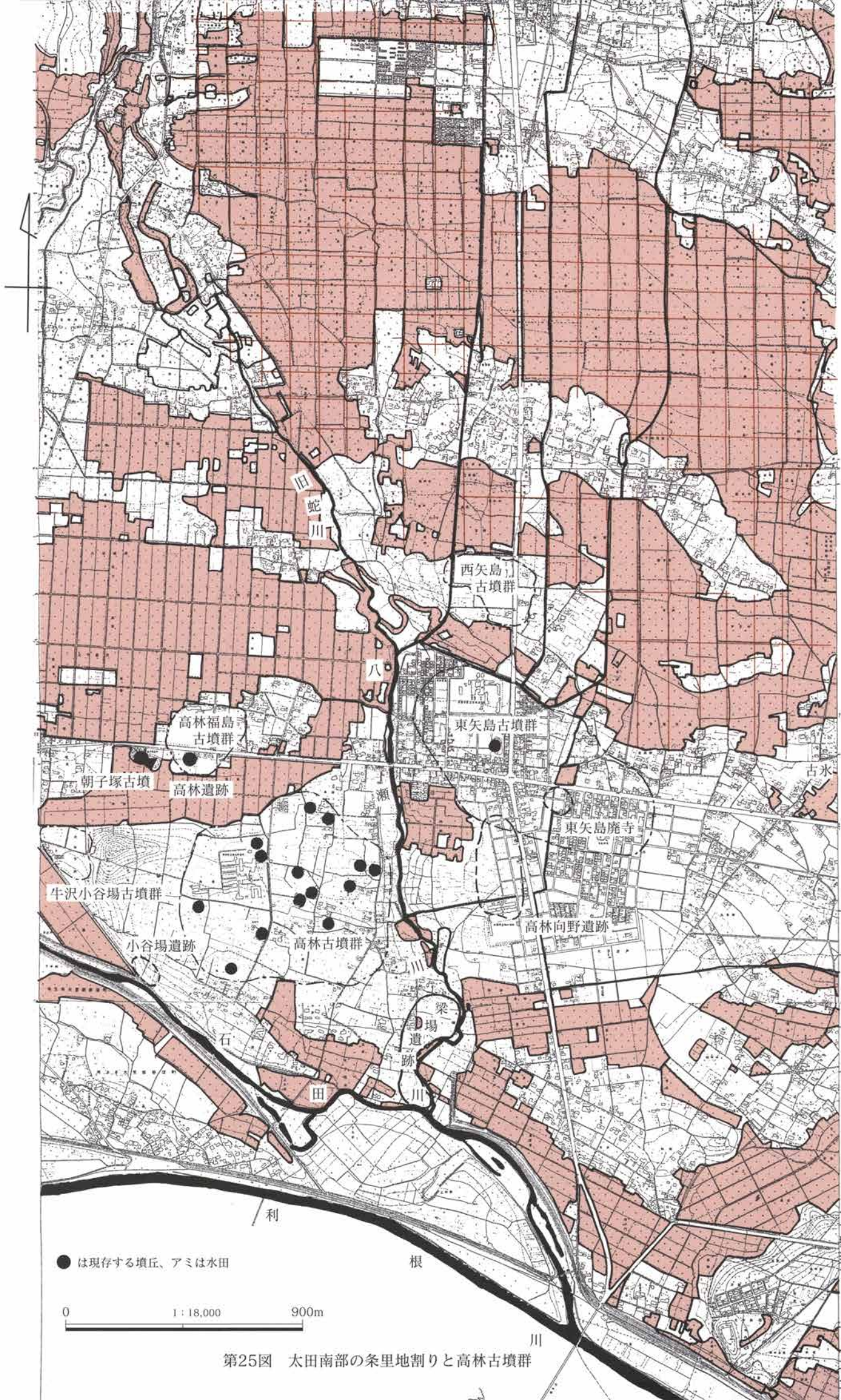
り、さらに東矢島廃寺(東矢島遺跡と同じだが、第25図では『太田市史通史編原始古代』の位置とした)がある。後者は文字瓦が出土しており、8・9世紀の寺院跡もしくは官衙跡と考えられている。八瀬川右岸で西に1km離れた小谷場遺跡でも、9世紀の住居址が発見されたと言う。

一方、高林台地以外では、古代のそのような遺跡は確認されていない。しかし台地北側の沖積地では、大規模な条里制地割りが残っていた。1960年代に作成された現存する最も古い都市計画図に見られる方格地割りを、第25図に示した。現在の国道407号線の旧道にほぼ重なる南北の走向が見える。またここには示さなかったが、旧蛇川の南西側でも同一の方格地割りが続いていたことが、戦後の米軍撮影写真に残っていると言う。

残念ながら、この条里地割りについては、発掘調査によって具体的な内容や時期が明らかになっているわけではない。ただ東矢島廃寺に当たる南北線を北に延ばすと太田市街地の北に接する金山山頂に達している。この金山山頂と東矢島廃寺を結ぶ線を基準として方格地割りが設定された可能性は高く、古代条里制地割りでの一般的な測量方法と見ることができる。

第25図に示した範囲で興味深いのは、八瀬川が旧蛇川との合流点までは、ほぼ南北地割りに沿っていること、そして東側で南北地割りとほとんど重なっている2本の水路が八瀬川に合流していることである。合流点以南では高林台地を縦断している八瀬川だが、北の沖積地では条里地割りの南北線の複数の流れを集めているのである。すでに指摘されているように、この地域の八瀬川は少なくとも、条里水田の幹線排水路としての機能をもって造られた人工の川であることは、間違いないだろう。

米軍写真に残るこの地割りの範囲は、金山を頂点



第25図 太田南部の条里地割りと高林古墳群

3 まとめ

とし概ね国道354号線に沿って太田市西端の下田島から大泉町の古氷^{ふるこおり}までの約6kmを底辺とする三角形に広がっている。古氷は東矢島廃寺の東1kmに接しており、^{おうら}邑楽郡衙の残存地名とも考えられている。

この古氷地名と直接結びつく古代遺跡はまだ知られていないが、隣接する東矢島廃寺は上述のようにこの地域の条里地割り設定と深い関係があった重要な施設であった可能性は高い。そのような東矢島廃寺に近接すると共に、条里水田の幹線排水路である八瀬川と石田川の合流点に位置する本遺跡の古代集落が、この地域の拠点的な居住域であったことは間違いないだろう。高林梁場遺跡で緑釉陶器が出土したことも、それを裏付ける。ただし、地形的には高林台地は東の大泉台地の延長であり、西の蛇川まで地形的な同一性がある。そのため須田茂も指摘しているように、古代には新田郡ではなく邑楽郡に属していたと考える方が自然と考えられる。

なお和名抄に記載された新田郡の郷名の中で、石西郷を太田南部条里遺存地域と高林台地を包括して比定する考えがある。その是非はここでは論じないが、和名抄の記録はあくまで10世紀前半のものであり、8世紀には邑楽郡の別の郷であったとしても何らおかしくはない。

また771(宝亀2)年まで武蔵国は東山道諸国に含まれていたため、新田駅から武蔵国府に向かう東山道武蔵路が存在していた。新田駅は大間々扇状地末端東部の現在の太田市北西部と新田町北東部境界付近に存在した可能性が高いため、そこから武蔵国府へ向かう最短ルートを考えて、高林台地周辺を利根川渡河の重要な地点とする説がある。

本遺跡周辺の上述のような状況を見れば、その蓋然性は高いと言えるが、また路面そのものの検出はない。ただし東矢島廃寺の文字瓦には「吉井」などがあり、40kmほど西方の吉井窯跡群で生産された可能性もあり、その場合は広域の流通拠点と見ることができる。

3-1-2 古墳時代の遺物と八瀬川

古墳時代の遺物は前期の土器片が僅か4片出土しただけで、遺構は全く確認できなかった。

高林梁場遺跡では古墳時代後期の竪穴住居が14軒検出されているが、それは調査地の北側に集中していたとのことであり、本遺跡全体での古墳時代後期の集落は北端部分が中心であったと考えられる。

周辺での古墳時代のあり方を見ると、同じ八瀬川右岸の北西側には、高林古墳群が展開している。さらにそこから狭い低地を挟んだ北西側には前期の大前方後円墳である朝子塚^{ちようしづか}古墳と同時期の集落である高林遺跡及び高林福島古墳群がある。また高林台地西端には牛沢小谷場古墳群が見られる。一方、八瀬川左岸では後に東矢島廃寺が造営されるあたりを中心に、東矢島古墳群が展開していた。そして狭い低地を挟んだその北にはやや狭い西矢島古墳群もあった。

各古墳群の内容は、『太田市史』によれば、次の通りである。

牛沢小谷場古墳群は、17基の小円墳で構成され、大部分は後期と推定される。だが5世紀もしくはそれ以前のものも含まれていた可能性が考えられている。

高林福島古墳群は、横穴式石室を持つ4基の小円墳で構成される。7世紀後半と考えられている。

高林古墳群は、南西側の高林不動古墳群と北東側の高林西原・弦巻古墳群に分けられることもあるが、約80基が存在していた。その端緒をなすのが5世紀後半から6世紀前半に形成された7基の帆立貝形古墳で、全長40～70mの規模を測る。その後6世紀中頃から横穴式石室の小円墳が次々に築造されていったとされている。

東矢島古墳群は、旧九合村第60号墳(全長111m)など6基の前方後円墳(100m級5基、50m級1基)を中心に形成されていた。これらの前方後円墳は横穴式石室を持つと共に、主軸を台地の走向である西北西・東南東方向にそろえていた。いずれも、6世紀中頃から後半に形成されたとされている。また周

辺には11基の小円墳があり、そのうちの道風山古墳は、7世紀中葉の方墳である可能性も考えられている。

西矢島古墳群は、50m級の前方後円墳1基を含む22基で構成され、ほとんどは小円墳である。時期的には東矢島古墳群と同時期とされる。

高林遺跡は、高林福島古墳群の中に位置する前期の集落遺跡で、石田川式期の2軒の竪穴住居が発見されている。近接する前期の大前方後円墳である朝子塚の墳丘からも、石田川期の土器片が発見されている。だが集落と朝子塚の間に時間差があるのかは、不明である。

以上のような状況をまとめると、まず前期には高林台地から北西に少し離れた微高地上に、朝子塚古墳や高林遺跡が形成された。そして中期には帆立貝形古墳が集中する高林古墳群が大きな墓域になる。後期になると、その前半に首長墓クラスの大前方後円墳が次々に築造されて、東矢島古墳群として成立する。さらにその頃から後半にかけて爆発的に各古墳群で小円墳が次々と造られることになった。なお東矢島古墳群の中には、前述のように終末期に近い方墳の可能性のあるものもあり、その場合は同位置に存在する東矢島廃寺との時間的な間隙は小さいことになる。

このような周辺状況を見るなら、本遺跡北側での後期の集落は、基本的にこの時期に爆発した小円墳群、特に高林古墳群の中に見られるものと直接関係があると考えるのが自然であろう。また本遺跡で発見した前期の土器片と同時期の遺跡は、最も近いのが高林遺跡になるが、距離的にそこから流れて来たとは考えにくい。本遺跡内にも前期の集落があった可能性が推定できる。

もしそうならば、本遺跡は古墳時代前期と後期の居住域になる。ところが高林古墳群のあり方を見るなら、上述のように中期の帆立貝形古墳群の築造から始まっている。そのため中期の集落も本遺跡に存在したとしても不思議ではない。

いずれにしても本遺跡は、高林古墳群と密接な関

係のあった居住域であることは確かである。

さてここで考えねばならないのは、八瀬川の性格である。すでに上述のように、条里のラインに沿って南流し、高林台地を縦断する八瀬川は、古代の幹線排水路であった可能性は高い。

この八瀬川の形成について、『太田市史』では周辺の古墳群との関係から、次のように推定している。

高林台地を縦断する部分は、旧蛇川の流れを変流した人工的な流れである。そしてこの部分を境にして高林古墳群と東矢島古墳群にそれぞれ対岸への連続性がないことから、台地縦断部分の八瀬川は高林古墳群の形成時期である5世紀には造られたと推定できる。そのような部分に古代になって条里排水路が合流されたことになる。

この考えについて、現状ではまだ当否を確定するだけの資料はない。高林台地を縦断する八瀬川の対岸には古墳時代の古墳群や遺跡が本当に続かないかは、不明である。古墳群については昭和初期の段階で墳丘が残っていたものに限れば、そのような非連続性が見られるが、すでに破壊されていたものが対岸に存在していた可能性は完全には否定しきれない。同様に本遺跡の古墳時代集落が続いていなかったかどうかについても、明確な決めてには欠けている。

なお、北側で八瀬川は西矢島古墳群を縦断している。少なくともこの部分は条里ラインに沿った排水路であることは確かであり、この古墳群を縦断することに不自然はない。

参考文献

『市内遺跡X』、太田市教育委員会、1994

『太田市史 通史編 原始古代』、太田市、1996

3-2 県内の草創期爪形文土器出土遺跡について

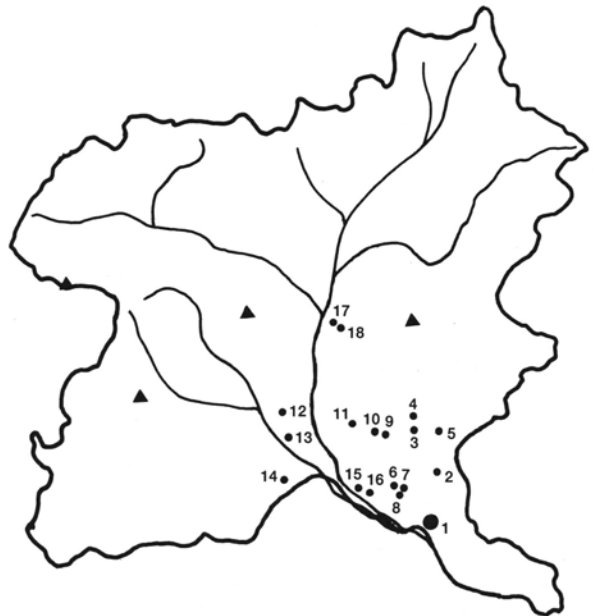
今井和久

梁場遺跡では、縄文時代草創期～中期の土器片が、南側の低地黒色土などの調査で総数118点出土している。その内訳は、草創期爪形文土器5点、早期前半撚糸文土器50点、早期後半条痕文系土器2点、前期(諸磯式期か)1点、中期中葉阿玉台式期5点、勝坂式期1点、中期後葉加曾利E1式期3点、加曾利E2式期6点、加曾利E3式期11点、加曾利E2～E3式期32点、不明2点である。

やはり特筆すべきは、群馬県内では出土例の少ない草創期爪形文土器5点が出土したことであろう。出土した土器は、「ハ」の字状の爪形文が数段施文されているもの2点、爪形文が2～3段施文されているもの3点で、それぞれ同一個体と思われる。県内では当該期土器の出土例は少なく、研究も停滞していたのが実情である。そこで、ここでは県内の草創期爪形文土器出土遺跡とその概要を紹介したい。紙面の都合上、実測図は省略させて頂く。爪形文土器は、隆起線文土器より一段階新しく位置づけられ、多縄文系土器が共伴する例もある。県内では、第13表の遺跡で、爪形文土器が出土しているが、遺

構出土のものは、西鹿田中島・下宿・五目牛新田遺跡の3遺跡(第26図参照)のみである。特に、下宿遺跡土坑出土の土器片は、6個体に復元されている。

今回、5点(2個体)ではあるが、本遺跡の資料が加わったことは大変意義深く、該期土器研究の上で重要な資料となり得るであろう。なお、残念ながら、本遺跡では草創期の石器は検出されていない。



第26図 爪形文土器出土遺跡位置図

第13表 県内の草創期爪形文土器出土遺跡

番号	遺跡名	所在地	出土土器の数量等	遺構等	文献
1	梁場遺跡	太田市	土器片5点(2個体か)	遺構外	本書
2	下宿遺跡	太田市	完形(復元)6個体	土坑	1985「下宿遺跡発掘調査概報」太田市教委
3	西鹿田中島遺跡	笠懸町	約200点(数個体)	竪穴、土坑	2000「群馬県西鹿田中島遺跡における縄文草創期の遺構と遺物」古代文化5
4	新川前田A遺跡	新里村	土器片十数点	遺構外	1994「新川前田遺跡」新里村教委(3と同一遺跡か)
5	鹿の川遺跡	笠懸町	土器片8点	遺構外	2000「第30回企画展 利根川流域の縄文草創期」笠懸野岩文化資料館
6	中江田A遺跡	新田町	土器片9点	遺構外	2001「中江田A遺跡」新田町教委
7	中江田B遺跡	新田町	土器片6点	遺構外	1985「中江田遺跡発掘調査報告書」新田町教委
8	中江田原遺跡	新田町	土器片1点	遺構外	1997「中江田遺跡群」新田町教委
9	下触牛伏遺跡	赤堀町	土器片約40点(数個体)	遺構外	1986「下触牛伏遺跡」群埋文
10	五目牛新田遺跡	赤堀町	土器片数点	竪穴、包含層	2000「第30回企画展 利根川流域の縄文草創期」笠懸野岩文化資料館
11	飯土井中央遺跡	前橋市	土器片9点(数個体か)	包含層	1991「飯土井中央遺跡」群埋文
12	日高遺跡	高崎市	土器片1点	調査トレンチ	1999「史跡日高遺跡遺構分布確認試掘調査概報2」高崎市教委
13	剣崎長瀬西遺跡	高崎市	土器片約20点	遺構外	1999「高崎市史 資料編1 原始・古代I」
14	田島遺跡	藤岡市	土器片3点	遺構外	2000「藤岡市史 通史編 原始・古代」
15	神谷遺跡	境町	土器片7点	表採	1983「神谷遺跡の爪形文土器と周辺遺跡」群馬考古通信第8号(坂爪・中東)
16	三ツ木遺跡	境町	土器片2点	遺構外	1996「境町史 第3巻 歴史編上」
17	北町遺跡	北橋村	土器片27点	遺構外	1996「北町遺跡 田ノ保遺跡」北橋村教委
18	芝山遺跡	北橋村	土器片1点	遺構外	1993「芝山遺跡」北橋村教委

写真図版



調査区全景(北から)



遺跡遠景(南東から)



遺跡遠景(北東から)



石田川(西から)



利根川(東から)



13号遺構セクション(西から)



13号遺構全景(西から)



2号遺構遺物出土状況(西から)



2号遺構遺物出土状況(東から)



2号遺構使用面(東から)



2号遺構掘り方(北から)



3号遺構遺物出土状況(西から)



3号遺構使用面(東から)



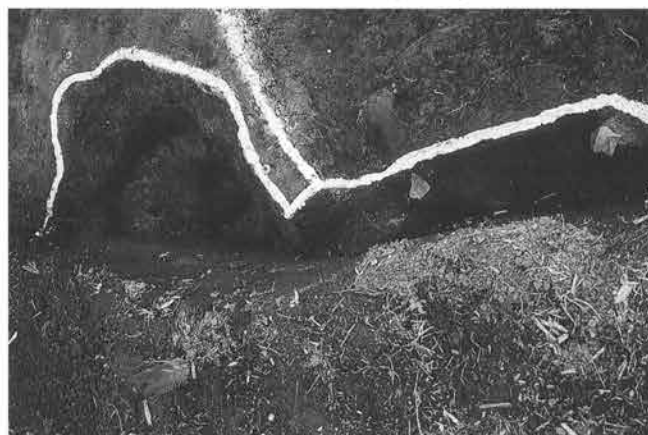
3号遺構貯蔵穴遺物出土状況(南から)



3号遺構貯蔵穴全景(南から)



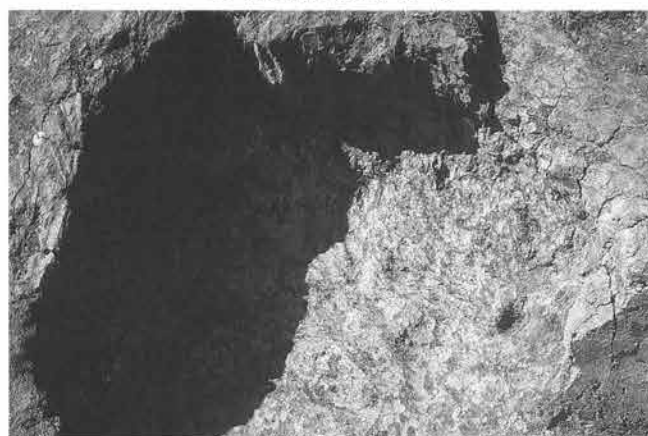
12号遺構遺物出土状況(東から)



12号遺構掘り方(西から)



1号遺構遺物出土状況(東から)



1号遺構全景(南から)



6号遺構遺物出土状況(南から)



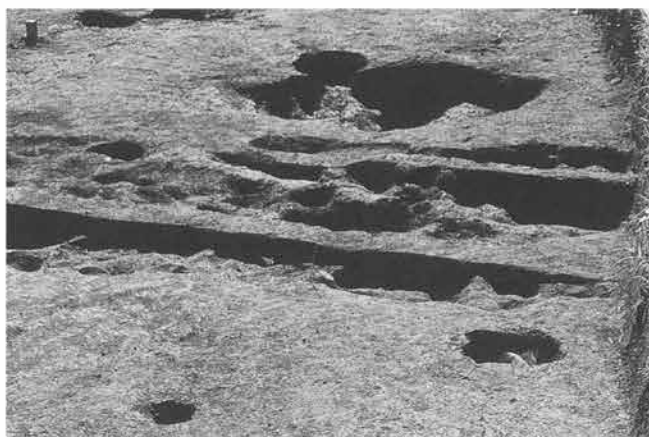
7号遺構セクション(西から)



8号遺構全景(南から)



11号遺構セクション(南から)



4・9・17号遺構全景(北から)



9号遺構遺物出土状況(南から)



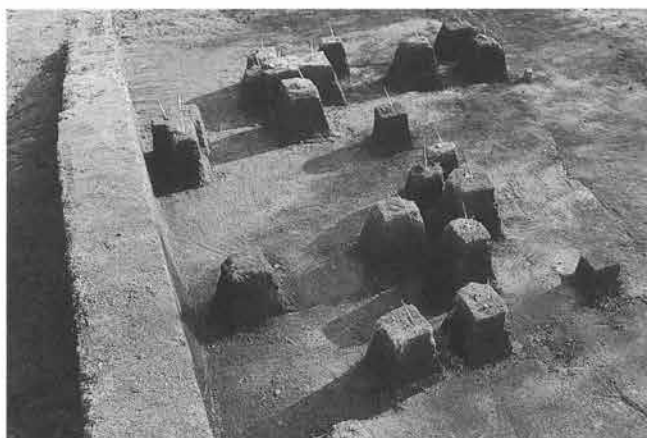
17号遺構遺物出土状況(南から)



10・16号遺構全景(南東から)



18号遺構全景(北から)



低地(黒色土)遺物出土状況(北から)



13遺-1



3遺-1



3遺-2



3遺-3



2遺-1



2遺-2



2遺-3



2遺-4



1遺-1



1遺-5



1遺-2



1遺-6



12遺-1



12遺-3



12遺-2



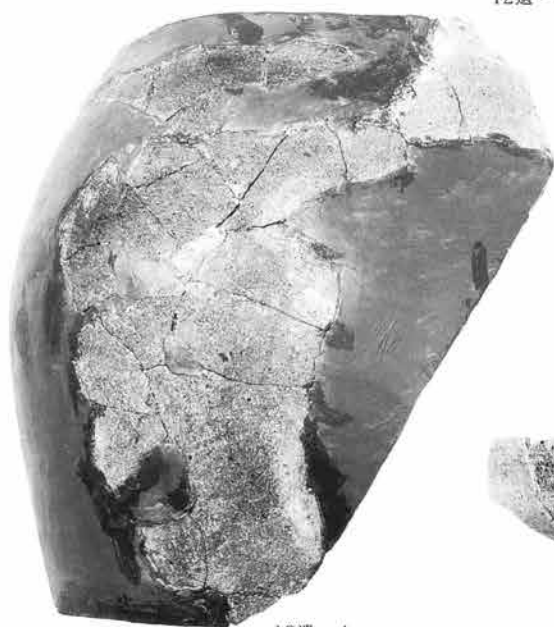
12遺-4



1遺-3



1遺-7



12遺-4



1遺-4



6遺-1



9遺-1



9遺-2



16遺-1

1~16号遺構出土遺物

PL 6



縄-1a



縄-1b



縄-2a



縄-2c



縄-2b



縄-3



縄-4



縄-5



縄-6



縄-7



縄-8



縄-9



縄-10



縄-12



縄-13



縄-11



弥-1



弥-2



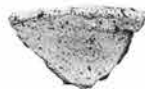
弥-3



古-1



古-2



古-3



古-4



平-1

報告書抄録

ふりがな	やなばいせき											
書名	梁場遺跡											
副書名	一級河川石田川広域基幹河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書											
巻次	第1集											
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書											
シリーズ番号	第327集											
編著者名	坂井隆 今井和久											
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団											
所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2 Tel 0279(52)2511											
発行年月日	平成15(2003)年11月28日											
ふりがな	ふりがな	コ	ー	ド	北	緯	調査期間	調査面積	調	査	原	因
所収遺跡名	所	在	地	市	町	村	遺跡番号	東	経		m ²	
やなばいせき 梁場遺跡	ぐんまけん おおたし 群馬県太田市			10205			00799	36°14'46"	20010910	}	300m ²	一級河川石田川広 域基幹河川改修事 業
	たかばやしみなみちよう 高林南町							139°22'35"	20011228			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項					
梁場遺跡		縄文時代 弥生時代 古墳時代	埋甕1基 なし なし		土器 土器 土師器		瓜形文土器、撚糸文土器					
	集落	奈良・平安時代	竪穴住居3軒、土坑5基 ピット8基		土師器、須恵器		黒色土器					
		近世	土坑1基									

梁場遺跡 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第327集 一級河川石田川広域基幹河川改修事業に伴う発掘調査報告書



平成15年(2003年)11月21日印刷

平成15年(2003年)11月28日発行

編集 / (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県北橋村大字下箱田784番地の2

電話 0279-52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷 / 川島美術印刷株式会社